関西大学『社会学部紀要』第35巻第1号，2003，pp.157-210　ISSN 0287-6817

研究ノート

「李登輝来日」をめぐる4大新聞の荷重報道の比較研究

木村洋二・林　文川・板村英典

To Issue or not to Issue a Visa to "Ri Toki": A Comparative Study of the Headlines of Japanese Major Newspapers in 2001.

Yohji G.KIMURA, Bunsen RIN, Hidenori ITAMURA

Abstract

In social communications, message are always communicated with a meta-message which indicates positive or negative importance of the message itself. We call the latter elements of human communication "semio-weights". Newspapers express this semio-weights (implicitly or explicitly) by means of the font of letters of the headline, as well as the space of the article. We analyzed the size of headlines and keywords of articles reporting the "issuing a visa to Ri Toki", the ex-president of Taiwan, which raised a big dispute around April of 2001 in major Japanese newspapers.

The strength of positive or negative semioweights were measured and plotted to visualize the correlation respective newspapers and to track the process of changing opinions. The convergence characterizes the formation process of public opinion in democratic society with plural media.

Key words: newspaper, headline, Ri Toki, semio-weight, Taiwan, public opinion, democracy, pluralism, communication

抄　　録

社会的コミュニケーションにおいて、情報はメッセージ内容だけで伝達されることはない。人間が伝達し、また受容するメッセージは、必ずその重要性と信憑性についての荷重要素（メタメッセージ）をともなう。新聞は限られた紙面への割付けと見出しの構成によって、この荷重成分つまり記事の重要性を伝達する特有のメディアである。本稿は、2001年3月～4月にかけて、李登輝元台湾総統の訪日ビザ申請をめぐって日本の4大紙がくり広げた「荷重報道」について、紙面上に展開された「記事面積」と「見出し文字の大小」を取りあげて定量化した。さらに、「見出し語」の選択性にふくまれる（暗黙の）価値評価について定性的分析を加え、これらをあわせて時系列のグラフとして表示する手法を開発した。荷重報道の「セミオグラフ（semio-graph）」と名づけたこの表示法によって、各新聞社の「報道姿勢」をより具体的に記述し、その通時的な変化の軌跡や各社間の違いを視覚的な形で（初歩的な段階ではあるが）比較・検討することが可能になった。デキゴト（ニュース）に対する強調や軽視、色づけなど選択的な「重みづけ」（荷重）のあり方に注目するこの研究法を発展させることによって、受け手にも送り手にも明確に意識されることなく生きられる「メディアの無意識」の次元に一定の照明をあたえることができるかもしれない。

キーワード：新聞、報道、見出し、荷重分析、李登輝、台湾、世論、民主主義、メディア、コミュニケーション

I 序　　論

民主主義社会ではメディアは不偏不党の客観報道を旗印にすることが多い。例えば、朝日新聞では「不偏不党の地位に立っての言論を貫く」ことを朝日綱領に掲げている。読売新聞は「左右両翼の独裁思想に対して敢然として戦う」ことを読売信条にした。毎日新聞は「言論の自由独立を確保し、真実敏速な報道と公正の世論喚起を期する」ことを毎日憲章に挙げている。しかし、ある出来事を報道することは、他の出来事を報道しないことでもある。記事を書くこと、そしてそれを紙面のどの場所にどれくらいの大きさで掲載するかは、出来事を選択し、その重要性を評価することである。本論は、ある特定の出来事の報道に対して新聞メディアが暗黙のうちに行っている「重みづけ」と「正負の評価」のあり方を、ソシオン理論［木村2001］の「荷重」概念を援用して、実証的に研究することをめざすものであり、そのための最初のノートである[1)]。

I-1 荷重とコミュニケーション

主体（個人や集団）は、環境とデキゴト（event）を介して接する。さまざまなデキゴトの重要性を差別化し、また、それらが望ましいか望ましくないかで正と負に分極する。「荷重（semio-weights）」は、主体がデキゴトに対して付与するプラスーマイナスの「重みづけ」の大きさであり、デキゴトに対する「予期のポテンシャル量」［木村　2001］である。主体は、荷重を対象に投射することで予期を起ちあげ、デキゴトの到来に先回りして選択的に対応を準備することができる。環境はこの荷重の投射によって、有意味な「世界」として、それなりのリアリティをもってあらわれると考えられる。

社会システムにさまざまなデキゴトについての情報を供給するマスメディアも、この「荷重機能」つまりデキゴトの重みづけの働きによって、社会システムにおける「現実の構成　social construction of reality」（P.Berger&T.Luckmann1966＝1975）に大きな役割を果たしている。それは誰の目にもはっきりと見えることもあるが、隠れた形である場合もある。たとえば、新聞における社説や評論は、メッセージ内容自体がプラスーマイナスの荷重評

1）この研究ノートは、台湾からの留学生である林文川が木村の指導のもとに関西大学大学院社会学研究科に提出した修士論文を、板村が加筆したものである。「荷重報道分析」と名づけたこの方法は、今のところ新聞メディアの「アジェンダ設定機能」に関する簡単な「内容分析」の試みにすぎない。今後、より客観的で精密な分析手法を開発していくなかで、メディアの「現実構成」機能を明らかにするひとつの研究方法として発展させていきたい、とわれわれは考えている。本稿はその可能性を打診するための準備ノートである。

価であることを明らかにした意見報道である。これに対し、普通の記事の「見出しの大きさ」や「記事自体の分量」や「頻度」は、荷重の大きさそのもの（賛成であれ反対であれその出来事の重要性そのもの）を反映しているといえる。しかし、この大きさは誰の目にもはっきりと映るものながら、無意識のうちにうけとめられることによって、気がつかないうちに、その出来事の価値評価（正負の荷重評価）が受け手の現実構成に影響する、と考えられる。本研究では、このように新聞紙面に隠された荷重要素に注目してその成分を定量化し、時系列でのその量の変化を一定のグラフに構成する。このグラフから、複数のメディアによる「くり出し—くり込み変換」を通じて一定の世論が形成されていく過程を概観することができるだろう[2)]。

Ⅰ-1･2 「荷重空間」としての新聞紙面

メディアにおいて、すべてのデキゴトが報道されるわけではない。報道されるもの、伝えられるものは、すでに選択され媒介されたデキゴトであり、裸形の「事実」ではない。とくに、「紙面」という限られた２次元空間の複合を媒体とする新聞報道においては、まず、掲載される情報量が限定され、したがって記事はきびしく取捨選択されざるをえない。さらに、新聞メディアにおいては、記事内容とは独立に、特定の見出しが大きくあるいは小さく構成される。こうした見出しの大きさや記事に割かれる面積は、そのままある新聞社が「そのデキゴトがどれほどの重要性を持っているか」の荷重評価（重みづけ）を示す指標になっていると考えられる。例えば、新聞社がこれから取り上げようとする事件・デキゴトが重要であればあるほど、そうでないデキゴトに比べてより多くの面積や字数を使い、見出しも大きく伸張させて我々に伝えようとする。新聞紙面は、単に情報メッセージを配列した空間ではなく、あるデキゴトに対して新聞社の下した評価が荷重された複合的な空間だと考えられる[3)]。

2）2001年４月10日に台湾の李登輝元総統が持病の心臓病治療のために日本への「入国ビザ」を申請したことに始まり、ビザ発給の是非とその評価をめぐって主要新聞が報道合戦を繰り広げた。台湾から留学していた林は、李登輝訪日について日本の各新聞社がどのように報じているかに非常に大きな興味を持った。李登輝訪日のビザ発給について賛成側の意見を取り上げ、大きく見出しにして報道する新聞社もあれば、逆に反対側の意見を見出しに大きく取り上げて報道している社もあった。その他にも、「ビザ発給」の事実だけを大きく取り上げた報道もあった。これらの見出しの付け方をはじめとする報道の仕方や取り上げ方自体にニュアンスの違いが感じされることに気がついた私たちは、デキゴト（ニュース）に対する強調や軽視、色づけなど選択的な「重みづけ」（荷重）のあり方自体に注目した「荷重報道の研究」が必要ではないだろうか、と考えた。この研究を発展させることで、受け手にも送り手にも明確に意識されることなく生きられる「メディアの無意識」の次元に一定の照明を当てることができるかもしれない。

3）荷重はメッセージを伝える媒質の様相によって伝えられ、また読みとられる。ある同じメッセージを大声で伝えた場合と、ささやくような小声で伝えた場合とでは、構成されるリアリティに違いが出てくる。この例では「声の大きさ」や「緊張度」が情報の「荷重成分」となる。新聞では「見出し」の大きさがこの「声」の大きさにほぼ相当する。

重要なことは、これらの荷重要素はデキゴトそれ自体の内容を示す「メッセージ」としてではなく、メッセージに付随する「それ以外の要素」によって暗黙のうちに伝達され、あるいは構成される、という点にある。新聞紙面では記事に割かれた「面積」だけでなく、「文字の大きさ」「文字数」「順序」「頻度」なども、そのデキゴトの重要性を示す指標（荷重要素）となる。新聞紙面は、伝えられる記事内容（メッセージ）に、そのデキゴトに対する正負軽重の荷重評価が反映された2次元の「荷重空間」（メッセージ×荷重ポテンシャル）と考えることができる[4)]。

以下、李登輝訪日をめぐる日本の4大新聞の荷重報道を整理し、比較・分析する。

Ⅱ　4大新聞の報道荷重分析

Ⅱ-1　対象と方法

まず、2001年4月5日から4月27日までの朝日新聞・産経新聞・毎日新聞・読売新聞の4紙の李登輝訪日に関する記事249本を全て集めて荷重原資料とした。

次に、それぞれの記事の大きさは出来事の重要性、つまり「荷重」の大きさに対応しているとの仮定から、全ての記事の「見出し」のポイントやスペース（面積）を計測し、文字数を数えて数値化した。

そして全249本の記事から「正負の荷重評価」の差異が目立つ主要な記事見出し36本を抽出し、同時に31本の論説記事の内容について、李登輝訪日に好意的か非好意的かについての印象をボランティアに評価してもらい、正負の分極を調べた[5)]。

最後に、荷重要素に関わる各紙の報道量の時間的な変化をグラフ化した。縦軸にプラス—マイナスの荷重評価を、横軸に時間経過を対応させている。さらに、荷重成分のグラフに工夫を加えることでそれぞれの新聞の特徴を明らかにした[6)]。

4）ソシオン理論において「情報」は「メッセージ」と「荷重」の積と規定される（「情報」＝「メッセージ」×「荷重」）［木村1999, 2000, 2001］。中井久夫はコミュニケーションに「伝えるもの」と「伝わるもの」があると指摘している［中井1991］。この場合「伝えるもの」とは「メッセージの意味内容」であり、「伝わるもの」とはメッセージそれ自身の「重み」や「暖かさや冷たさ」「硬さや柔かさ」といったニュアンスである。この「伝わるもの」（正負のリアリティの強さとその質）が本稿の「荷重」に近い。

5）249本全ての記事を取り上げて荷重評価の分析をしたかったが、時間の制約でできなかった。したがって、他にも正負のニュアンスの違いが見られる記事が含まれている可能性は否めない。しかし、5名の大学院生に記事を読んでもらい、選択した記事に問題がないことを確認してもらうことで林個人の主観的バイアスをできるだけ排除した。この研究は、不十分ながら、あくまで今後の研究に役に立つ考え方や使える表現技法を開発することを目的とした研究ノートである。

さて、次章以降具体的な分析にはいるが、その前に今回分析する李登輝訪日報道についての全体的な概要を以下にまとめておく。

Ⅱ-2　李登輝訪日報道の概要

Ⅱ-2･1　李登輝訪日までの経緯

李登輝は1923年、日本統治下の台湾・台北県で生まれた。京都帝国大学（現京都大学）在学中に学徒兵として出陣し、終戦後は台湾に戻り台湾大学を卒業した後、アメリカのコーネル大学において農業経済博士の学位を取得した。その後アメリカから台湾に戻って、蒋介石の息子の蒋経国に認められ政界入りした。そして1988年に蒋経国総統が死去した後に、李登輝副総統が台湾総統に就任した。

さて、李登輝はこれまで訪日のため日本に３度ビザの申請をしているが、３回ともその発給を拒否されている。

まず1994年８月の広島アジア大会の際にアジアオリンピック評議大会が李登輝を招待したが、日本政府は日中関係を配慮してビザの発給を拒否し、李登輝は広島アジア大会への出席を断念した。しかし総統就任中の1995年６月に、李登輝は中国の外交封鎖を突破して母校コーネル大学を訪問するために初めてアメリカを訪問した。この時、中国の反発と抗議によって中米関係は一時的に緊張状態となった。

翌年1996年３月に、台湾で初めての民選総統選挙が行われた前後には、李登輝の当選を阻止するために、中国側は台湾に対して地対地ミサイル発射訓練などの軍事演習を連続して実施した。その時、アメリカの２隻の航空母艦も台湾海峡の中間線に派遣され、台湾海峡において緊張が高まった。選挙の結果、李登輝は中国からの軍事的威嚇にも関わらず台湾人民の熱烈な支持を得て、初代の民選による台湾総統（第９代台湾総統）になった。このように李登輝訪米と台湾総統選が原因で中米関係はさらに緊張したのである。

さらに翌年の1997年11月に、李登輝は母校・京都大学創立百周年記念式典に出席しようとしたが、２回目となるビザ申請も取り下げることとなり、やむを得ず出席をあきらめた。その後の1999年７月に、李登輝がドイツのラジオ番組を通して台湾と中国の関係を「国家と国家の関係、少なくとも特殊な国と国との関係」と公言した。中国はこの発言に対して大々的に威嚇行為（台湾海峡西の福建省での軍事演習）や反対発言を行った。

6）木村は複数の主体による「多元多重くり込み―くり出し変換」を荷重の「もちつき変換」と名づけた。これによると複数のメディアがそれぞれの視角・意見を提示し、それらが相互作用によって（あたかも「もちつき」をするように）「世論」が形成される［木村2001］。

そしてその翌年2000年10月に、李登輝は長野で開かれたアジア・オープンフォーラムに出席しようとしたが、3度目となるビザの申請も取り下げることとなり、訪日を再び断念することになった[7)]。そして李登輝は2000年3月18日に台湾総統の座を降り、民間人となったのである。

Ⅱ-2·2　李氏訪日報道の概略

李登輝は2001年3月下旬、訪米からの帰りに心臓病の治療を受けるために日本を訪問したいとの意欲を示した。そして翌月の4月4日に森首相は河野外相にビザ発給の検討を指示した。同日、中国の唐家旋外相は中国を訪問していた高村正彦法相に対して李登輝訪日の動きに注意するよう促した。その2日後の4月6日に、自民党の亀井静香政調会長は森首相に対して「やめると言っても今は首相だ。ビザ発給についてやれるだけやりなさい」と強く賛成の意見を公言した。また、亀井政調会長は翌日の討論会で発給を躊躇するような姿勢になっていると日本政府を批判した。李登輝は2001年4月10日、代理人を通じて心臓病の緊急治療を受けるために台湾の日台交流協会台北事務所に日本へのビザを申請した。

翌日の11日に、福田康夫官房長官は記者会見で「交流協会に確認したところ、ビザの申請および受理はないということだ」と説明した。台湾の李登輝前総統ビザ発給問題に関して衛藤征士郎副外務大臣は記者会見で、「書類一式は台北事務所で所長が預かっている。そのことからすれば当然申請があったと認識している」と述べた。しかし、福田官房長官は同日の記者会見で「申請はない」と従来の見解を改めて強調した。このような彼らの発言からは、日本政府内部の見解が不一致であることが窺える。そして4月13日に、扇千景国土交通相、麻生太郎経済財政担当相、平沼赳夫経済産業相、斎藤斗志二防衛庁長官、笹川堯科学技術担当相は閣僚懇談会で同意する意見を次々に示した。同日、河野外相は福田官房長官との懇談会で「慎重に対応したい」と慎重論を改めて表明した。

2日後の4月15日に李登輝は台北郊外で記者会見を開いた。訪日のためのビザについて「訪日は心臓手術後の継続治療のためで、政治目的はない」と語り、日本政府に「国際的、人道的立場からビザを発給してほしい」と要請した。また日本政府が「申請も受理もしていない」としていることについては「嘘をついている」と批判し、さらに「日本には（か

7）出入国管理令に日本に入国を認めない人の条件がある。その第一は犯罪者であり、第二は日本に対して害を及ぼす可能性のある人間である。李登輝のビザ発給については、法務省出入国管理責任者である町田幸雄入国管理局長が2000年4月に中立の立場から「李登輝さんを拒否する法的な根拠はありません」と証言している［角間2000：25-27］。

つて第二次世界大戦中にユダヤ人にビザを与えた）杉原千畝氏がいた。今回も人道的な対処を望んでいる」と述べた。また「これまで日本政府を困らせないという方針でやってきたが、今回は病気治療が目的であり、引き下がることはできない」と表明した。

翌16日に、慎重論を主張していた福田官房長官は記者会見で「わが方も人道的な観点、さまざまな要因を勘案しながら考慮している」として、初めて人道的な観点に配慮する姿勢に転換した。同日、川島外務次官も記者会見で「人道的視点を配慮しながら検討する」という意見を出した。また河野外相と衛藤征士郎副大臣と政務官らは対応を協議した。副大臣はビザを発給すべきだという決断を求めたが、この時に結論は出なかった。

17日に森首相は官邸で午前と午後の２度にわたって改めて外相と会談した。首相は人道上の緊急的な措置としてビザ発給に前向きな意向を示した。外務省は同日ビザ発給は「適当ではない」との見解をまとめ、河野外相が森首相に伝えた。政府はいったんビザの発給はしないとの方針を固めたが、台湾との関係を重視する閣僚や与野党議員から「一民間人への人道的配慮」を求める声が強まり、首相官邸が外務省に再検討を指示した。

李登輝訪日問題について森首相は18日に初めて記者会見で「結論は早急に出したい」と述べ、一両日中にもビザ発給に慎重な河野外相と協議し、結論を出すことを表明した。

政府は19日、台湾の李登輝前総統が申請している来日ビザについて、滞在先を限定するなどの条件をつけて発給方針を固めたことで李登輝側との最終調整に入った。李登輝との協議がまとまれば20日に正式発表する予定であった。しかし同日、中国側から日本への反発の声が高まった。政府内には対中関係への悪影響を懸念して発給に反対する意見があり調整が続いていたが、李登輝訪日は心臓病治療を目的としているために、人道上の理由から発給を拒否することができないと最終的に判断された。そして李登輝来日にあたり、日本政府が李登輝に求めていた「政治活動を行わない」などの条件についての折衝が20日に正式に決着した。一方、中国はこれに強く反発していたが、政府は「人道上の判断」と説明することで中国側の理解を求めた。

そして李登輝は22日の午後に関西空港に到着した。実に16年ぶりに日本の土を踏むことになる。滞在先は大阪の帝国ホテルである。李登輝は心臓手術後の継続治療を目的にその後も約５日間滞在する予定だが、中国が強く反発する状況下での訪日となった。翌23日には大阪城を見学した。24日、中国の外務省章啓月報道局副局長は「日本政府は教科書問題で中国人民に釈明しないまま李登輝氏にビザを発給し、両国の協力に必要な環境を破壊した」と述べ、同時に「李鵬氏訪日を延期あるいは中止する」と述べて、台湾の李登輝訪日

が李鵬全国人民代表大会常務委員長の訪日に与える影響についての見解を発表した。

その一方、李登輝は岡山県倉敷市倉敷中央病院に入院し、心臓病の検査と治療を受けた。そして翌25日に退院し、その夕方大阪のホテルに戻り、翌日の26日に日本を離れ台湾に戻った。

以上が李登輝訪日の大まかな流れである。

Ⅱ-3　ビザ発給をめぐる対立構図

今回の李登輝訪日に際してはビザの発給をめぐって賛否両論が繰り広げられたが、そのどちらが正しいというものではない。ある1つの見方に対してそれとは違った意見が提示されることで議論は活発化し、世論というものが調整されてゆく。このような「意見」の存在と「世論」の形成については岡田と高橋がそれぞれ以下のように述べている。

意見が公共的関心事や論争的諸問題をめぐって生起し形成されることが何よりも重視されている。火の無いところに煙は立たぬように、意見の分裂、対立、抗争という火種が人々の公共的利害関心と活動を触発し、活性化するのである。[岡田1998：12]

世論はただ争点をめぐる賛成意見と反対の意見を表明されるだけではなくて、話し合いや討論などの心理的な交流によって、合意の点に達する、と言われている。その過程では、意見という要素が重要である。「意見」が存在しなければ、討論や話し合うような心理的な交流が成立できない。さらに合意する可能性もなくなる。[高橋1975.：48-51]

李登輝訪日に際して賛成派と反対派がそれぞれどのような観点で「意見」を行い、それらをぶつけ合い、そして「世論」が形成されていったのか。それぞれの主張のポイントを簡単に以下にまとめてみたい。

Ⅱ-3･1　賛成・積極派

賛成派の主張のポイントは、心臓病治療を受ける必要のある李登輝の訪日ビザ発給は緊急を要する「人道的な問題」であり、また現在総統の座を降りたひとりの民間人である李登輝が政治的な目的を持ってはいないと認識しているものである。

今回分析したなかでこの立場にたつ人物をまとめると以下のようになる。

森喜郎首相　阿部官房副長官　衛藤征士郎副外務大臣　扇千景国土交通相　麻生太郎経済財政担当相　平沼赳夫経済産業相　斎藤斗志二防衛長官　笹川堯科学技術担当相　鳩山民主党代表　小沢自由党党首　石原慎太郎東京都知事　中嶋嶺雄東京外国語大学学長　岡崎久彦元駐タイ大使　米田健三自民党議員　中山正暉自民党議員　小池百合子保守党議員である。

そして賛成・積極派の実際に報道された意見をまとめると以下のようになる。

まず、産経新聞は４月８日の２面で〈公職を離れた人は政治力があろうとなかろうと私人、民間人である。河野外相のように定義する事は、政治の恣意を招く事になりかねない。英国、チェコは昨年李氏を私人として、受け入れた。米国もその意向という。しかも、今回の来日は心臓疾患の検査、治療が目的とされる。それでも、来日を拒否するというのであれば、もはや人権問題や人権無視と言わざるを得ない。〉という社説を掲載した。そして〈主権の尊厳、国益の観点からも、李登輝氏の訪日問題は欧米と同様に日本政府が主体的に判断すべきである。李氏に入国拒否で報いてはならない。それは多くの日本国民の反発を招くばかりか反中感情を高め、台湾の親日派を一気に追いやる危険性も秘めている。〉とも語っている。

毎日新聞は４月11日の５面に〈今の李氏は総統の地位を去り、国民党の要職にもない。民間研究機関の名誉会長という民間人に戻った。〉と主張し、また〈日本と台湾の間には外交関係はないが、活発な人的往来がある。昨年は日本から84万人、台湾から94万人をこえる人々が観光やビジネスで訪れている。政治活動をしないかぎり、李氏の査証申請を入国管理の基準通り、公平に処理するのはむしろ日本の義務ではないだろうか。〉といい、そしてさらに〈前総統であろうと民間人の査証で大揺れするようでは、日中ともに世界に笑われないか。〉という意見を掲載した。

同日の読売新聞では３面に〈私人のビザは淡々と発給せよ〉との見出しの社説で賛成の意欲を示している。内容は〈ビザ発給は日本の主権に関わる問題である。日本政府は法令に定められた入国許可の基準に照らして、判断する事柄である。外国政府に押されて、決めるようなことがあってはならない。〉という見解を示した。

翌12日に産経新聞は２面の社説で〈ビザ発給に反対しているのは外務省の一部官僚とその背後にいる親中派と呼ばれる政治家たちである。その中に、北朝鮮に対する人道援助を口にする政治家も含まれている。ならば、なぜ、李登輝氏に援助の手が差し伸べられないのだろうか？北京公認かどうかが人道援助の判断基準だというなら、普遍的である人道に

対する冒涜である。さらに踏み込んでいえば、常日頃人権擁護や人権主義を標榜している人々はここで声をあげなければ、「ご都合主義の人道屋」とのそしりを免れないだろう。〉という意見を掲載した。

15日の毎日新聞の投書欄では、〈病を患った一民間人が長く愛した日本の地を訪れたいと願う、その思いを外務省は無視している。病気治療と中国との関係は、別問題です。これが一般庶民の感覚です。〉の意見と、〈国民に非難されながら、政府は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）へコメを援助した。今度も国民の批判を浴びているにもかかわらず、李前総統を無視する、外務省っていったい何のために存在するのですか？国民の税金を使って、恥ずかしい事をするために、存在しているのでしょうか？主権国家として、人道上、誰もが正しいと思える判断をしてほしい。〉というふたつの意見を掲載した。

また、19日の毎日新聞5面の社説では〈李氏入院は人道目的である。それを拒否する理由は見当たらない。それだけの話である。淡々と処理することが最も非政治的な対応である。〉との意見を掲げ、さらに〈日本は人道目的を尊重する社会である。そのような社会をつくっていることに、誇りを感じている。中国国内では人道目的より、1つの中国が優先するなら、それに干渉する筋合いはない。だが、日本国内では、人道目的が優先することも、中国は理解すべきである。〉と主張している。

Ⅱ-3･2　反対・慎重派

以上の賛成派に対して、反対・慎重派の主張のポイントのほとんどは日中関係を考慮したものとなっている。つまり、李登輝が病気治療の理由で訪日すると日本を舞台に「1つの中国政策」に背反する台湾独立を目指す政治活動をするかもしれないので、日中関係に悪影響を及ぼしかねないと主張している。以下に整理したものは、その代表的な人物である。

福田康夫官房長官　河野洋平外相　公明党荒木清寛外務副大臣　槙田邦彦アジア太平洋局長　阿南惟茂駐中国大使　自民党橋本龍太郎行政改革担当相　神崎武法公明党代表
冬柴鉄三公明党幹事長　志位和夫共産党委員長　土井たか子社民党党首　渕上貞雄社民党幹事長　自民党野中広務　社民党田秀夫　浅井基文明治学院大学教授　元外務省中国課長
五十川倫義（中国総局長）　自民党西川公也

そして、実際に報道された反対・慎重派の意見をまとめると以下のようになる。

まず朝日新聞4月8日に〈李氏は病気治療より台湾の国際的地位の向上と台湾独立を狙

う政治活動のせいで中国を怒らせて、日中関係に悪影響を及ぼす〉ことと、〈米偵察機と中国戦闘機の接触事故をめぐり、米中関係の行方に神経を尖らす日本政府に台湾の李登輝訪日問題という難題が持ち上がっている。総統を退いたとはいえ中国の反発は必至で教科書問題に加え新たな火種を抱えることになる〉との意見を掲載した。

４月12日に朝日新聞は〈現在の日中関係は歴史教科書や中国農産物に対する緊急輸入制限などの問題をめぐって、摩擦が起きている。こんなときに李氏の訪日を認めれば、両国の関係がさらに悪化する恐れがある。〉と提示した。

また、〈中国政府は台湾問題を日中間の原則問題と位置づけている。李氏は中国と台湾は「特殊な国と国との関係」と主張するなど、中国から強烈な反発を招いてきた。そうした言動の故に中国は李氏をただの私人と認めるわけにはいかないのだろう。〉と論じた。

他にも〈日本政府は1972年９月に、中華人民共和国が中国唯一の合法政府であることを認めた（日中共同声明第２項）〉。そのうえ、〈日本政府は中国が表明する「台湾は中華人民共和国の領土の不可分の一部である」という立場を十分理解し、尊重すると約束した。だから中国のほかに，もう１つの「国」が台湾に存在するという認識には絶対に同調できない。李氏訪日は日中共同声明の「１つの中国の原則」に違反した〉という評論が掲載された。

Ⅱ-4　報道量の全体的比較

それでは、李登輝氏訪日に関する４月５日から４月27日までの記事にみられた荷重成分ついて、面積・本数・文字のポイントを集計し、報道量の差をグラフにしてその全体を比較する。

Ⅱ-4･1　荷重空間としての紙面

（１）総面積

全ての記事の面積を集計した結果、以下のグラフのようになった。

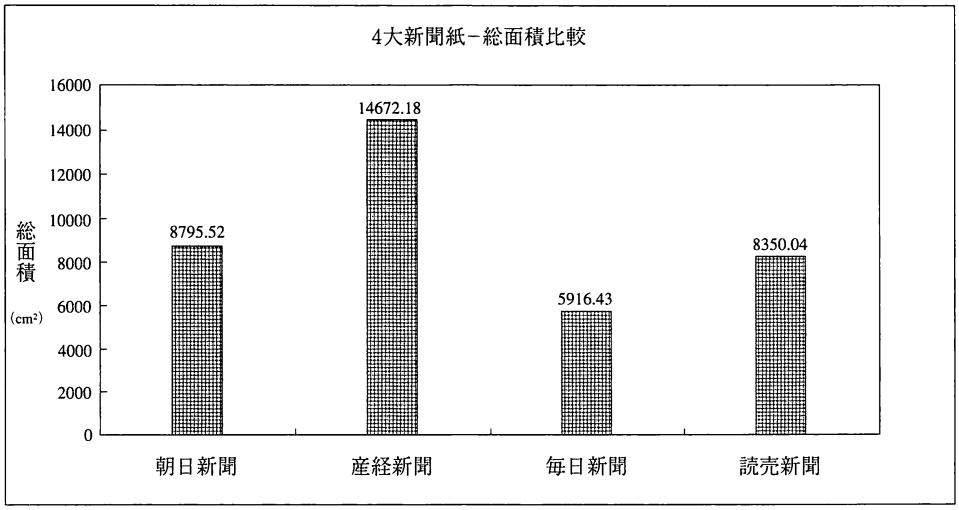


Fig. 1

４大新聞紙で比較した場合報道量の多い順に、産経新聞＞朝日新聞＞読売新聞＞毎日新聞の順となり、李登輝訪日問題をもっとも大きな面積で報道したのは産経新聞であることがわかる。

（２）見出しの総面積

次に、見出しの総面積を集計したものが以下のグラフである。

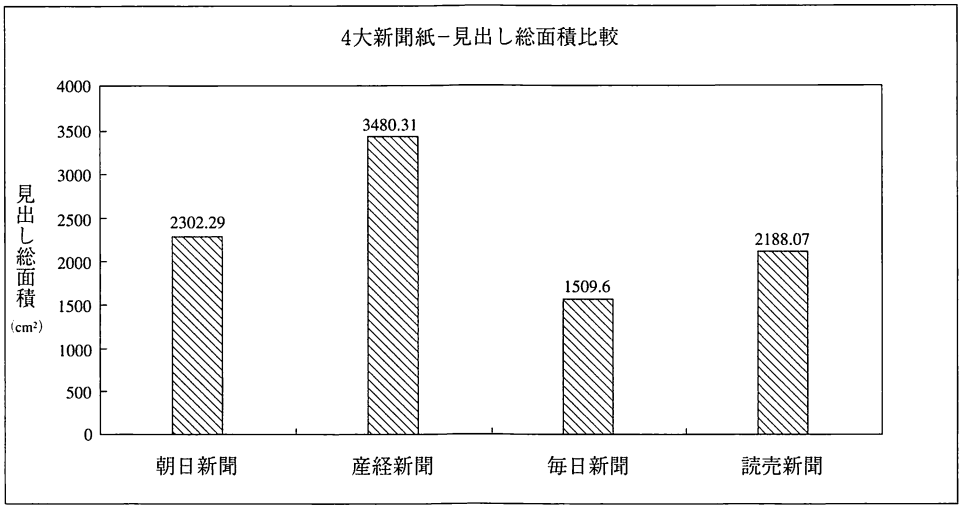


Fig. 2

記事の中でも最も荷重が大きいのは見出しであり、見出しは記事の核心である。以上のように李登輝訪日を巡っての報道は面積の大きい順に、産経新聞＞朝日新聞＞読売新聞＞毎日新聞であった。このことから、見出しを大きく伸張させて報道した新聞社は産経新聞社であったことがわかった。

Ⅱ-4・2　字数

そして、総字数を集計したものが以下のグラフとなる。

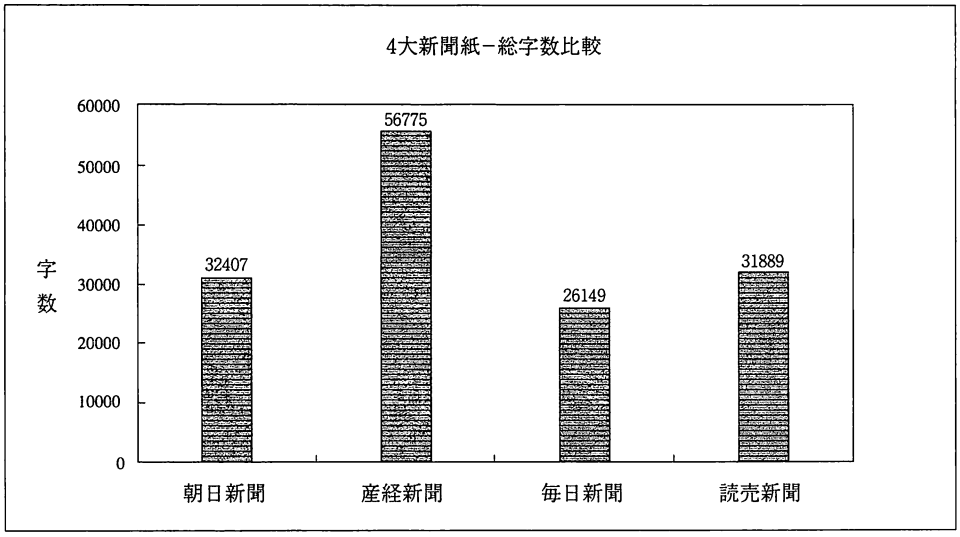


Fig. 3

これも字数の多い順に産経新聞＞朝日新聞＞読売新聞＞毎日新聞となっている[8)]。

8）新聞では見出しの部分がその重要度に応じて適宜伸縮させて報道が行われるが、記事本文に使われている文字の大きさは一定である。したがって、「どれほどの面積を割いて報道したか」ということと「どれほどの字数を費やして説明したか」には比例関係があるので「字数」を測り、それを「荷重要素」としても差し支えがない。

Ⅱ-4·3　本数

今回分析したすべての本数を集計した結果が以下のグラフである。

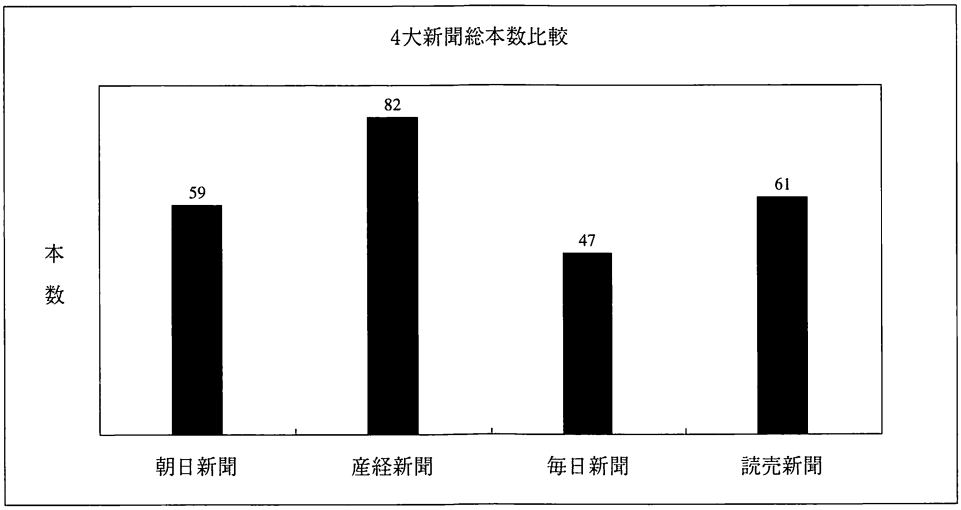


Fig. 4

本数の多い順に、産経新聞＞読売新聞＞朝日新聞＞毎日新聞となっていた。

Ⅱ-4·4　主見出しのポイント

各記事の主見出しの大きさを集計し、それを各新聞社の総本数で割った平均ポイント数が以下のグラフである。

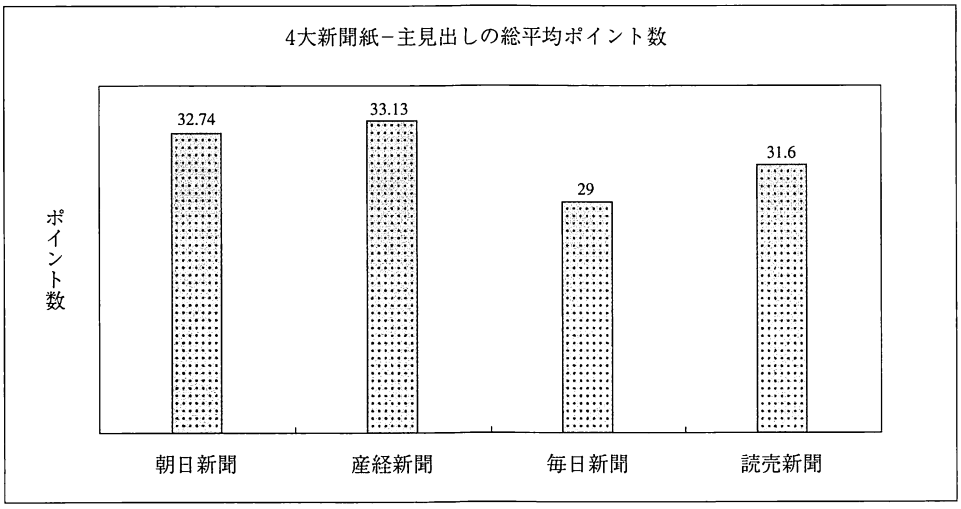


Fig. 5

大きい順に、産経新聞＞朝日新聞＞読売新聞＞毎日新聞となった。この結果から、総じて大きな見出しを付けた新聞社は産経新聞社であることがわかった。

Ⅱ-4･5　考察

以上の報道量総比較から、総面積・見出し面積・字数が全体を通して最も多かった新聞社は産経新聞社であることがわかった。

Ⅱ-5　報道量の通事的変化

この章では各新聞紙の報道量を通時的に比較する。

まず、以下のグラフは今回分析した報道量（字数）の時間的な変化を折れ線グラフで表現したものである。なお、グラフでは赤を朝日新聞、黄色を産経新聞、青を毎日新聞、緑を読売新聞で示している。このグラフを手がかりにそれぞれの日に報道された事実・その特徴とその報道量との関係を分析する。

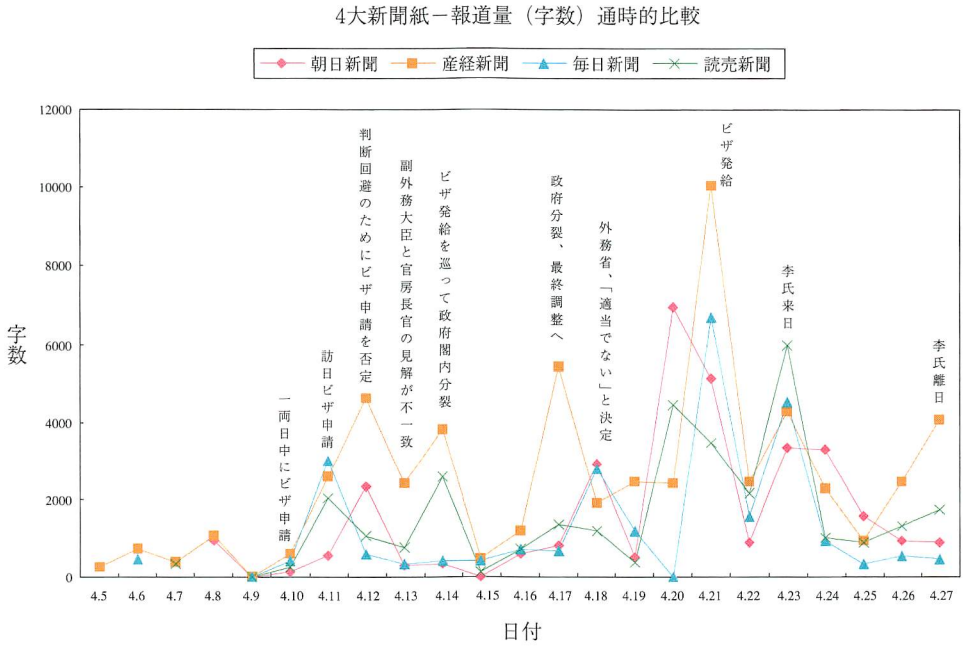


Fig. 6

各紙最初に報道された記事

李登輝訪日問題に関して最初に報道したのは4月5日の産経新聞である。そして、4月

６日に毎日新聞が、４月７日に読売新聞、４月８日に朝日新聞と続いた。

４月11日

主な報道内容は李登輝が代理人を通して訪日のためのビザを申請したことであった。この日、産経・毎日・読売新聞の報道量は2000字を超えた。したがって、この３紙に関していえば李登輝がビザ申請をしたことに対して重みを持たせたといえる。逆に朝日新聞では大きく取り上げられていなかった。

４月12日

日本側は判断を回避するために、福田官房長官が申請も受理もないと申請自体を否定する見解を強調した。産経新聞の報道量は4000字を超えて最も多く、続いて朝日新聞も2000字以上の報道を行い、この日２番目の報道量となった。

４月13日

衛藤副大臣が「申請があった」と述べたのに対し、官房長官は改めて「申請はなかった」と反対の事実を述べた。このことに関して、産経新聞と読売新聞がほかの２紙より報道量が多かった。

４月14日

この日は産経新聞の報道量が最も多く、次いで読売新聞となった。この２紙はビザ発給をめぐって２つに割れる日本の閣内を報道し、その背景と代表人物を紹介した。しかし、毎日新聞はこのことに関してはほとんど報道せず、朝日新聞に至っては台湾行政院長の発言のみを小さく取り上げた以外、全く報道がなかった。

４月16日

この日の報道の焦点は、李登輝が記者会見を開いて「ビザ発給は間違いなく10日に申請した」と強調し、それについて日本政府が「申請はない」という見解を示したことに対して「嘘だ」と述べたことである。このことについて産経新聞が最も字数を割いて報道し、次いで読売新聞、毎日新聞、朝日新聞の順番になっていた。

4月17日

主な報道の内容は人道的な視点からビザを発給するかどうかの最終調整に入ったことである。福田官房長官はこれまでの立場を転換し、記者会見で李氏の健康状態を配慮することが必要との見方を示した。この日の産経新聞の報道量は5000字以上となり、次いで読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の順となった。

4月18日

報道の焦点は、外務省がビザの発給は「適当ではない」と一旦決めたことである。この日、朝日新聞が初めて報道量で1位となった。次いで毎日新聞となり、全体を通して報道量の多い産経新聞が3位に下がった。16・17日の2日間報道量が2位であった読売新聞は4位に下がった。

4月19日

森首相が18日に記者会見を開き、「人道的見地を踏まえて判断しなければならない」と述べ、初めてビザ発給への意向を公にした。これに関して産経新聞は他の3紙より大きな報道量で報道し、2000字を超えて再び1位となった。

4月20日

この日、朝日新聞が6000字を超えて1位に上がった。朝日新聞の全体の報道量を通してみると、この20日が最も報道量の多い日である。つまり、朝日新聞はこの日の報道に重みを持たせたと言える。朝日新聞の次に多かったのは読売新聞で、4000字を超える報道量だった。また、常に報道量の多い産経新聞はこの日3位となり2000字強で報道している。

20日の主な報道内容は、政府が19日に李登輝前総統が申請している来日ビザについて、滞在先を限定するなどの条件をつけ、さらに政治的活動もしないのであれば発給するとの方針を表明したことであった。もう1つは中国側の反発についてである。朝日新聞は〈中国強く警告〉〈日中関係冷え込み必至〉〈押し切られた外務省〉などの見出しの記事を出し、反対側の述べた意見を他の3紙よりも大きく扱っていた。

なお、この日毎日新聞は李登輝訪日に関する報道は全くされていなかった。非常に特異な現象であるといえる。

４月21日

この日は正式にビザ発給が決まった日である。

産経新聞と毎日新聞が１番の報道のピークを迎え、朝日新聞と読売新聞の報道量もかなり伸びている。産経新聞では実に10000字を超える報道量であった。20日に何も報道していなかった毎日新聞はこの日6000字以上で大きく報道をした。

Ⅱ-6　記事別荷重分析比較

Ⅱ-6･1　新聞における「見出し」

新聞記事の中でももっとも大きく荷重（正負の重み付け）がかけられるのは見出しである。ここではまず見出しの荷重要素を数量的に分析し、評価の分極について考察する。

見出しは記事における荷重の核心を必要最小限の言葉で表現したものである。つまり、見出しはもっとも簡潔な記事そのものであり、「何を見出しにするか」は「何がニュースか」と同義である［朝日新聞整理部1983：180-181］。しかし、ニュースはいろいろな素材から成り立っており、その中のどの部分に重点を置くのかによって見出しは様々な評価を付けることになる。

見出しの評価は「素材による評価」と「表現による評価」に分けることができる。ニュースの核心となる見出しは、５Ｗ１Ｈの６要素の中からいくつかを抜き出し、それらに順位をつけて提示される［新聞整理研究会1966：41-90］。編集者はどのような重要度に基づいてどれだけの要素を抜き出すのか、また他の見出しとの相対的関係をどう評価するのかを判断する。

また、空白の活用や字数の要約の仕方、型の美しさなどによって見出しの表現に評価をつけ、読者の目を引くように工夫されている［朝日新聞整理部1983：180］。見出しはニュース記事の重要な導入部となるため、ニュースバリューによって素材は選別・整理される。しかし、伊大知は「この作業は一社の主張や主義などが介入する場合がある」［伊大知1981：151-152］と述べている。整理部の編集者はニュースの質と量を判断し、見出しを決めている。それらは「最も重要な部分は何であるか」についての手がかりを提供することになる。

編集者は日々記事を取捨選択し、最も重要な（送り手にとって荷重価値が大きい）部分を判断して、格上げをしたり、増大・強調をしたりする。例えば、できるだけ短い文章で様々な荷重表現の手法によって格上げを行い、読者が記事を読む気になるように工夫をす

る。したがって、このように様々な荷重要素（見出し面積や活字の大きさ、順序、背景の色、言葉の感情強度、方向性など）に注目することによって評価の分極をつけることができるのである。

しかし、この大きさは誰の目にもはっきりと映るものであるにもかかわらず無意識のうちに捉えられており、気が付かないうちにその出来事の価値評価（正負の荷重評価）が忍び込んでいる可能性がある。ゆえに、ここでは見出しに見られる荷重要素を抽出し、その比較を試みる。

Ⅱ-6・2　見出しの荷重分析

（1）分析の方法

①数量的荷重の比較

見出し面積（㎠）と見出しのポイントを主見出し・副見出し・小見出しのそれぞれについて比較した。なお、適宜50％に圧縮した資料を添付してある。また、実際の新聞見出しを添付していないものについては、表で主見出し・副見出し・小見出しを表示している。その表中にある「種類」は見出しの種類、「pt.」はポイント、そして見出しを添付した資料には各見出しの下に「A」「S」「M」「Y」の記号を付けてそれぞれ朝日、産経、毎日、読売の各新聞を示している。

②評価の分極（正負の重み付け）

調査の方法は4大新聞紙を対象に差異が目立つ記事の見出しを各9本選出し、それらを日付ごとに並べたものを配布した。それを元に李登輝のビザ発給を巡る見出しの評価（正負の重み付け）に点数をつけてもらった。調査対象者は7人である。

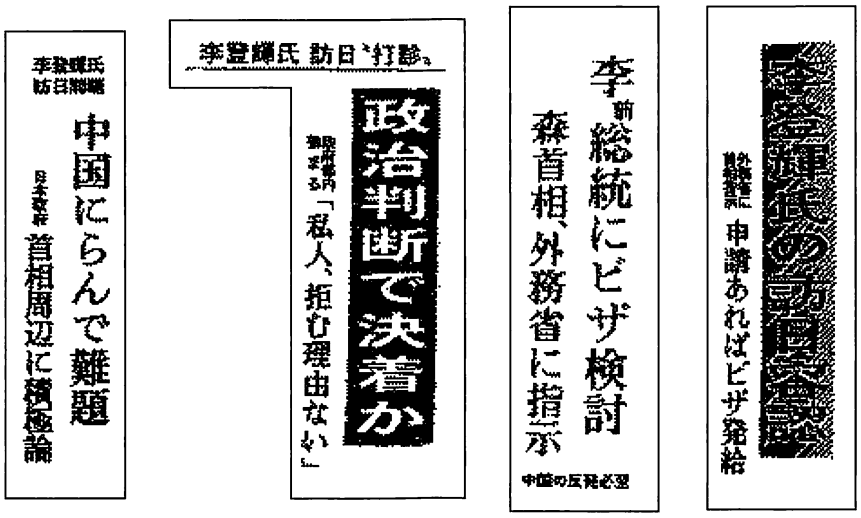
評価得点は、以下のように設定した。

・ビザ発給に「賛成」　＝「2点」
・ビザ発給に「どちらかといえば賛成」＝「1点」
・「中立あるいはどちらでもない」　＝「0点」
・ビザ発給に「どちらかといえば反対」＝「－1点」
・ビザ発給に「反対」　＝「－2点」

そしてこれらの総点数を集計し、その後で総平均点数を算出した。

今回は調査対象者の人数が不充分ではあるが、とりあえずの正負の分極と荷重評価を測定することはできたといえる。

（２）最初に報道された記事



A4.8　S4.6　M4.6　Y4.7

Fig. 7

	見出し面積	主見出しのポイント	副見出しのポイント	小見出しのポイント	平均点数
朝日新聞	51.87	36	28		−0.286
産経新聞	74.95	48	28		1.286
毎日新聞	70.56	36	36	16	0.428
読売新聞	62.78	48	22		1

Table. 1

①報道の概要

李登輝氏の心臓病治療のため、森首相が外務省に対してビザの発給を検討するように指示し、首相官邸や外務省などの関係閣僚が対応の検討に入った。これに対して中国が反発をした。

②見出しの分析

４大新聞のうち、朝日だけが〈中国にらんで難題〉という反対派の意見を36ポイントの主見出しにして重みを持たせた。毎日新聞は〈中国の反発必至〉という小見出しを16ポイントで載せている。

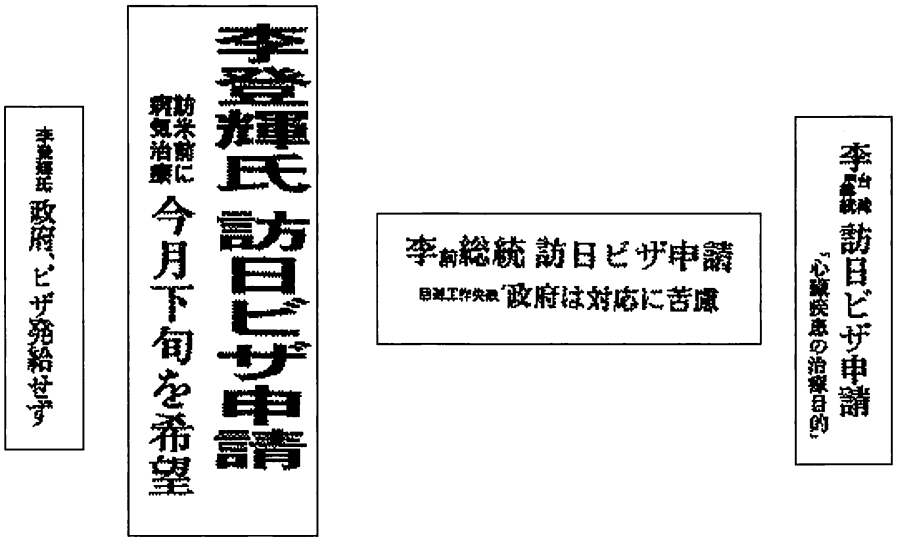
産経新聞と読売新聞はともに主見出し・副見出しの両方に賛成派の意見を載せて重みを持たせている。さらに、両紙とも主見出しには背景の色を濃い黒にして言葉の重みを増や

す効果を与えている。

③調査結果と考察

アンケート調査の結果は上の表の通りである。結果からは朝日新聞のみがビザ発給に対してマイナスの印象を持たせる見出しを付けていることがわかった。また、賛成意見に重みを持たせた他の3紙の点数から、その評価は産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞の順であることもわかった。

（3）2001年4月11日



A4.11　S4.11　M4.11　Y4.11

Fig. 8

	見出し面積	主見出しのポイント	副見出しのポイント	小見出しのポイント	平均点数
朝日新聞	16.48	28			−1.571
産経新聞	80.2	72	36	18	1.571
毎日新聞	40.68	28	24	12	0.143
読売新聞	30.08	28	16		0.857

Table. 2

①報道の概要

台湾の李登輝前総統は10日、日本で心臓病治療を受けるため交流協会台北事務所にビザ

の発給を申請した。森首相周辺では今回の訪日が心臓病治療のためであることを考慮して「人道的見地」からビザの発給を検討している。しかし、外務省幹部は同夜、「李氏からの申請書はまだ正式に出ていない」と述べ、日本政府としては受理していないとの立場を明らかにした。

②見出しの分析

朝日新聞だけが主見出しに〈政府、ビザ発給せず〉という反対派の述べた意見を入れた。他の３紙は〈訪日ビザ申請〉を主見出しに入れ、賛成派の意見に重みを持たせている。見出しの面積を比較すると、産経新聞＞毎日新聞＞読売新聞＞朝日新聞となっている。

そしてそれぞれの副見出しを比較すると、読売新聞は〈「心臓疾患の治療目的」〉を16ポイントで賛成側の主張を副見出しにしている。毎日新聞では〈政府は対応に苦慮〉という賛成でも反対でもない言葉を24ポイント副見出しに入れている。また、産経新聞は〈今月下旬を希望〉という李登輝の意思を36ポイントで副見出しにしている。さらに〈訪米前に病気治療〉という賛成側が強調している意見を16ポイントで小見出しにつけている。

③調査結果と考察

アンケート調査の結果、平均点数の順序は産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞＞朝日新聞であった。

４紙のうち朝日のみがマイナスの点数となっており、他の３紙に比べて否定的な印象を与えていることがわかった。

（４）2001年４月13日

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	副大臣「申請あった」 官房長官は改めて否定	主 副	28 22	35.02	0
産経新聞	衛藤氏「発給すべきだ」 政府の見解不一致 官房長官事実否認	主 副 小	36 26 14	55.02	1.286
毎日新聞	李氏ビザ申請「あった」 官房長官は否定 衛藤副外相	主 副 小	28 20 18	26	0.286
読売新聞	李登輝氏ビザ"門前払い" 政府内からも異論 及び腰外交鮮明	主 副 小	18 36 14	29.7	0.714

Table. 3

①報道の概要

李氏がビザ申請したことについて、衛藤副外務大臣は「申請があった」と述べて発給すべきだとの考えを表明した。逆に福田官房長官は「申請および受理がなされたことはない」と述べている。

②見出しの分析

産経新聞は主見出しに〈衛藤氏「発給すべきだ」〉という賛成の意見を載せ、さらに主見出しの背景を黒にすることによって賛成の重み付けを増加させる効果をつけた。

また、朝日と毎日もそれぞれ28ポイントで申請があったことについて重みを持たせている。しかし同時にそれぞれ官房長官が否定している事実を副見出し・小見出しにして伝えている。

読売新聞は18ポイントの主見出しで先に〈李登輝氏ビザ“門前払い”〉と書いてからそれを否定する〈政府内からも異論〉という言葉を載せて、賛成側の意見に重みを持たせている。さらに、14ポイントながら〈及び腰外交鮮明〉という賛成側の批判を小見出しにして政府を批判する賛成側の意見に重みを付け加えている。

③調査結果と考察

アンケート調査では重み付けの平均点数は、産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞＞朝日新聞の順であった。産経新聞は他の3紙よりも賛成側の意見に重みを持たせていたといえる。

（5）2001年4月16日

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	李前総統「政治目的ない」 ビザ発給強く求める 記者会見	主 副 小	36 28 12	52.06	0.429
産経新聞	ビザ公式に要求 日本政府の対応批判 心臓病の治療目的	主 副 小	48 26 12	52.92	0.714
毎日新聞	ビザ発給強く求める 日本政府の対応批判 李登輝氏記者会見	主 副 小	36 26 12	51.87	0.571
読売新聞	李登輝氏「ビザ発給を」 日本政府の対応批判 台北で会見	主 副 小	72 36 12	90.6	1.71

Table. 4

①報道の概要

李登輝は15日に台北郊外で記者会見し、訪日のためのビザについて「今回の訪日は心臓手術後の継続治療のためであって、政治目的はない」と語り、日本政府に対して「国際的・人道的立場からビザを発給して欲しい」と要請した。

②見出しの分析

産経・毎日・読売の３紙は「ビザの発給」を要請している意見を主見出しにしているが、特に読売新聞では〈李登輝氏「ビザ発給を」〉の部分を72ポイントにし、さらに背景を黒くしてその荷重を強めていた。

朝日新聞ではまず〈李前総統「政治目的ない」〉を36ポイントの主見出しにしている。そしてビザ発給の要請については〈ビザ発給強く求める〉の言葉で副見出しに入れている。

朝日とその他の３紙を比べてみると、朝日の主見出しである〈「政治目的ない」〉よりも他の３紙は「ビザ発給」を強く求めていることを見出しにして賛成の荷重を強めていたといえる。

③調査結果と考察

アンケート調査では読売新聞＞産経新聞＞毎日新聞＞朝日新聞の順となっていた。ここで読売新聞の平均点数は他の3紙よりも圧倒的に高く、見出しの紙面効果として賛成側の意見に重みを持たせていたことがわかる。

（６）2001年４月18日ａ

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	外務省「適当でない」 首相・外相再び協議へ	主 副	48 28	52.06	−1.429
産経新聞	ビザ発給の意向 首相きょうにも結論 人道重視	主 副 小	48 26 14	47.52	1.714
毎日新聞	首相、最終判断へ 外相、慎重論伝える ビザ発給	主 副 小	28 22 14	27.04	0.143
読売新聞	首相、発給検討を指示 李氏側応じる意向 滞在先限定	主 副 小	36 26 16	47.58	1.143

Table. 5

①報道の概要

森首相は17日、首相官邸で外相と会談し、人道上の緊急的な措置としてビザ発給に前向きな意向を示した。それに対して外務省はこの日「ビザ発給は適当ではない」との見解をまとめ、河野外相が森首相にその旨を伝えた。

②見出しの分析

それぞれの新聞の見出しを比較すると、朝日新聞のみが〈外務省「適当でない」〉という反対側の意見を48ポイントの主見出しにした。

また産経・毎日・読売新聞の見出しの順序を見てみると、朝日は反対派の外務省の意見を持って来ているのに対して、賛成側の首相のことを先に出して賛成側の荷重を増大させている。さらにこれらの主見出しを比較すると、まず主見出しのポイント数は大きい順に産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞であった。その副見出しを比較すれば産経新聞の副見出しは26ポイントの〈首相きょうにも結論〉であり、また読売新聞では〈李氏側応じる意向〉を26ポイントで副見出しにしており、それぞれ賛成側に関わる意見を増大させている。一方、毎日新聞は副見出しに〈外相、慎重論伝える〉を26ポイントで入れており、産経・読売新聞と比べるとそれほど賛成に関する意見を強めてはいない。

③調査結果と考察

重み付けの平均点数にはばらつきが出ている。ビザ発給に対する支持度は産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞＞朝日新聞であり、朝日新聞がかなり強いマイナスであることがわかった。

（7）2001年4月18日b

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	「日本なぜノーと言えぬ 中国大使が怒りの会見	主 副	22 14	21.63	−1.857
産経新聞	ビザ発給、拒否求める 「政治的な訪日」強調	主 副	28 18	26.78	−1.142
毎日新聞	駐日大使召還も 中国側	主 副	14 11	4.9	0
読売新聞	「政治的な狙い明白」 中国高官、日本政府けん制	主 副	20 12	17.52	−0.571

Table. 6

①報道の概要

中国の陳建駐日大使は記者会見を開き、李氏訪日は病気治療ではなく政治的理由によるものだとして日本政府に対してビザ発給を拒否するように求めた。

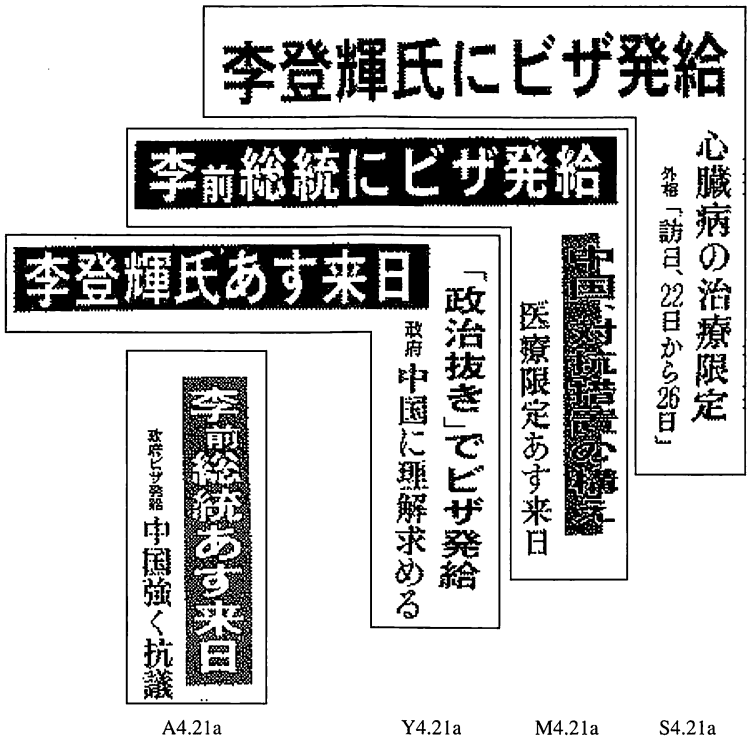
②見出しの分析

朝日新聞は〈「日本なぜノーと言えぬ」〉を主見出しにし、中国側の怒り、つまりビザ発給に対して反対側の意見を前面に押し出している。さらに背景を黒くしてその視覚的効果を強調している。そして他の新聞社の見出しを比較するとそれぞれ産経が〈ビザ発給、拒否求める〉、読売が〈「政治的な狙い明白」〉を主見出しにして〈中国高官、日本政府けん制〉を副見出しにしているが、朝日の見出しは反対派の強い言葉を使っていることがわかる。

③調査結果と考察

アンケート調査では、毎日新聞を除く3紙ともにマイナスの評価となっている。マイナスの強い順に朝日新聞＞産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞となっている。調査結果からも朝日新聞の言葉が反対派の意見を増大させているものであることがわかった。

（8）2001年4月21日a[9)]



A4.21a　Y4.21a　M4.21a　S4.21a

Fig. 9

	見出し面積	主見出しのポイント	副見出しのポイント	小見出しのポイント	平均点数
朝日新聞	111.15	48	28	14	−0.714
産経新聞	184.41	72以上	36	24	1.714
毎日新聞	175.15	72	36	28	0.142
読売新聞	160.77	72	36	28	−0.429

Table. 7

①報道の概要

20日になり、訪日目的を医療行為に限定することなどを条件に、人道的観点からビザを発給することが正式に決まった。それに対して中国は反発している。

9）この見出しは非常に大きいので20%に圧縮している。

②見出しの分析

この日、産経新聞は〈李登輝氏にビザ発給〉を72ポイント以上の大きさで主見出しにして伝えた。

産経・毎日・読売新聞の３紙は、ビザ発給についての事実を大きく取り上げて報じたが、朝日新聞だけが副見出しに〈中国強く抗議〉を28ポイントで載せ、反対側の意見に荷重をおいていた。逆に、産経新聞では中国について見出しでは全く取り上げられていない。

面積の大きさは大きい順に産経新聞＞毎日新聞＞読売新聞＞朝日新聞であり、主見出しのポイント数は産経新聞＞毎日新聞＝読売新聞＞朝日新聞の順であった。

③調査結果と考察

重み付けの平均点数は大きい順に産経新聞＞毎日新聞＞読売新聞＞朝日新聞となった。

（９）2001年4月21日ｂ

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	訪日取りやめ相次ぐ	主	36	25.84	−1.286
産経新聞	駐日大使召還か 王外務次官が厳重抗議	主 副	48 26	92.17	−1.143
毎日新聞	阿南大使呼び抗議	主	36	21.84	−0.857
読売新聞	中国が抗議申し入れ 対抗措置も示唆	主 副	20 12	16.56	−0.857

Table. 8

①報道の概要

中国の外務次官は阿南中国大使を呼んで厳重に抗議し、中国政府として必要な対応をせざるを得ないと述べた。陳建駐日大使召還か人的交流中止に出る公算が大きいとみられる。

②見出しの分析

４紙ともに中国の反発に関するタイトルをつけたが、見出しのポイント数は産経新聞が最も大きく、言葉の強さは朝日新聞の〈訪日取りやめ相次ぐ〉が最も大きい。面積を比較しても産経新聞は４紙中最も大きい。

③調査結果と考察

アンケート調査の結果、重み付けの平均点数は４紙ともマイナスとなった。マイナスの大きい順に朝日新聞＞産経新聞＞毎日新聞＝読売新聞である。感情的な言葉が強い朝日と

面積が最も大きい産経が他の2紙よりもマイナスの度合いが大きかった。

(10) 2001年4月22日

	見出し	種類	pt.	面積	平均点数
朝日新聞	李前総統今夜大阪入り 中国側、反発強める	主 副	48 28	58.91	−1.429
産経新聞	李登輝氏、今夕関空に	主	28	24.61	0.714
毎日新聞	李前総統きょう来日	主	28	17.51	0.714
読売新聞	李登輝氏きょう大阪入り	主	26	19.62	0.429

Table. 9

①報道の概要

李登輝前総統は22日夜に大阪の関西空港に到着する予定である。中国政府は対抗措置を含めて対応策を検討している。

②見出しの分析

4紙全てが李登輝来日に関しての主見出しをつけた。しかし、朝日新聞は副見出しに〈中国側、反発強める〉という言葉を使って反対側の意見を強めている。面積に関しては朝日新聞が他の3紙に比べても最も大きく、見出しのポイントも48ポイントと朝日が最も大きい。他の3紙の面積とポイントにはほとんど差がなかった。

③調査結果と考察

アンケート調査の結果は朝日新聞のみが大きなマイナスとなった。これにより、朝日新聞だけが反対の意見に重みをつけて報道したことがわかった。

(11) 総平均点数の比較

4大新聞を比較して重み付けの点数を平均した結果、以下の表の通りとなった。

	朝日新聞	産経新聞	毎日新聞	読売新聞
総平均点数	−0.904	0.746	0.143	0.444

Table.10

この集計結果から、朝日新聞だけが総平均点数がマイナスであることがわかる。これはすなわち、李登輝訪日報道において朝日新聞は見出しだけでもビザ発給に対して反対側の意見に重みを持たせた報道をしていたということである。

Ⅱ-6･3　論説記事の荷重分析

以上までは一般の報道記事の見出しに付帯する荷重要素を分析したが、新聞紙面には事件報道以外にも論説記事（社説・評論・投書）という記事がある。

この論説記事の中で社説は特にその新聞社の姿勢や考え方を如実に示すものである。例えば金子は社説について以下のように述べている。

社説は、新聞が社会的な事実に対して自らの責任と信念において、その主義主張および見解もしくは批判を行なうものであって、新聞のパーソナリティの現われであるといえよう。（中略）社説の特徴は、たとえそれが個人の意見であっても新聞社の見解であるとして取扱われるところに他の署名論文や署名記事と異なるところがある。社説は学識、経験、主義主張を正した権威ある論説委員によって執筆され、（中略）各新聞社とも一流のスタッフを選抜して論説委員室を構成し、社説の方向その他に関して充分に審議の上、新聞社の方針を決定し、公表することとなっている。[金子1976：226]

このように新聞社の立場を明確に反映する社説以外にも、新聞社は評論を選択して専門家や権威のある人の意見を引き合いに出すこともある。そしてまた、投書を選択し「民の声は神の声」という格言に示唆されるように国民の意見を反映することもある。

したがってここでは論説記事（社説・評論・投書）の評価得点を見出しと同様の評価基準で付けてもらった。

（1）方法

李登輝訪日に関する論説記事（社説・評論・投書）をもとに、７人の読み手にビザ発給問題をめぐる正負の重み付けの点数を付けてもらった。評価得点は見出しの分析の時と同様である。そして、総得点を集計し総平均点数を算出した。見出しの評価と同様人数的には不充分ではあるが、とりあえずの正負の分極と荷重評価の測定結果を知ることが重要である。

（2）結果と考察

結果は以下の表の通りとなった。なお、表中の（社）（評）（投）はそれぞれ社説、評論、投書を表している。

	日付	見出し	平均点数	総平均点数
朝日新聞	4.12	政治活動では困るが（社）	0.714	−0.893
	4.20	日中関係冷え込み必至（評）	−1.857	
	4.21	対中説明に誠意尽くせ（社）	−0.429	
	4.24	李氏訪日中 台の思惑何故読めぬ日本（評）	−2	
産経新聞	4.8	政府はビザ発給に勇断を（社）	2	1.684
	4.12	判断を誤って悔い残す（社）	2	
	4.15	李登輝氏ビザ問題で決断（社）	1.429	
	4.7	ビザ発給決断のときが来た（社）	1.833	
	4.21	李登輝氏禍根残してやっと実現日本を卑しめた外交対応（社）	2	
	4.12	何を恐れて李登輝氏のビザ申請断るのか　姑息な手段で政治的に処理するな（評）	1.857	
	4.13	認めてほしい李登輝氏訪日(投)	1.714	
	4.17	李登輝氏の思いに応じよ　ビザ拒否すれば日本の国家の汚点（評）	2	
	4.17	李氏へのビザ、政府は責任回避(投)	1.5	
	4.22	李氏へのビザ発給喜ばしい(投)	2	
	4.22	侮辱に当たる条件付き訪日(投)	1.714	
	4.23	真正面に病気治療国際世論納得させた（評）	1.142	
	4.26	李登輝氏「日本がかわるよ」（評）	1	
	4.27	李登輝氏の見事な戦略を見た 歴史は一人の人間によって作られた（評）	1.857	
毎日新聞	4.11	李登輝氏訪日そんなに騒ぐことなのか（社）	0.857	0.482
	4.19	ビザ発給を早急に決めよ（社）	1.833	
	4.23	「反発」利用のしたたかさ（評）	0.143	
	4.23	あくまでも民間人訪日（評）	1	
	4.23	タイミングが悪かった（評）	−1	
	4.18	拒否する理由はない（評）	1.429	
	4.18	入国自体は政治活動（評）	−1.857	
	4.15	李前総統へのビザ発給は当然だ(投)	1.857	
読売新聞	4.11	私人のビザは淡々と発給せよ（社）	1.5	1.371
	4.17	李登輝氏訪日 混乱を増幅するまやかし対応（社）	1.833	
	4.20	混乱を拡大した過度の対中配慮（社）	1.429	
	4.20	政府の対応卑劣一語（評）	1	
	4.12	李登輝氏入国認めるべきだ(投)	1.571	

Table.11

アンケート調査の結果、重み付けの総平均点数は朝日新聞が−0.893点、産経新聞が1.684点、毎日新聞0.482点、そして読売新聞1.371点であった。したがって、ビザ発給に対する賛成の度合いからいえば、産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞＞朝日新聞の順番となる。

以上の結果から、４大新聞のうち朝日新聞だけがマイナスとなり、それ以外の新聞ではプラスであった。この分析においても朝日新聞はビザ発給に対して賛成よりも反対側の意見に重みを持たせた報道を行っていたことがわかる。この順位の結果は、前章の「差異の目立つ見出し」の分析結果と一致するものである。

Ⅱ-7　荷重空間

この章では前章のアンケートで集計されたプラス・マイナス荷重評価と紙面の荷重要素との関係をいくつかの視点から分析する。

Ⅱ-7･1　荷重と誘導

まず、今回分析した249本の報道記事の中から明確な荷重要素の差異が出る見出し36本を選出した。

以下の図は横軸（Ｘ軸）に日付をとり、縦軸（Ｙ軸）に明確な荷重の差異が出た見出しの荷重係数をプロッティングしたものである[10)]。

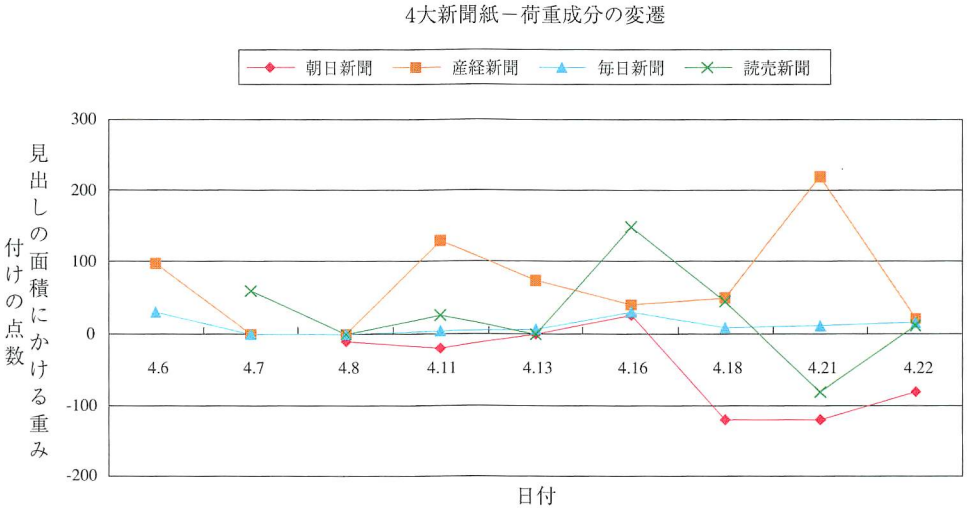


Fig.10

10）もともとは今回分析した報道記事249本全ての見出しの荷重差異を測定したかったが、時間の制限で選出した36本のみの結果からのグラフを作成した。もし、他の明確な差異が見られない見出しをも含めて集計したならば、４大新聞紙の特徴の差は小さくなるであろう。

このグラフから、朝日新聞は李登輝訪日について反対側の意見に重みを持たせて報道していたことがわかる。そしてそれとは逆に、黄色の線で示した産経新聞はプラスの評価、つまり賛成側の意見に重みを持たせて報道していたことがわかる。さらに産経新聞ではプラスの値も大きい。

青で示した毎日新聞の荷重係数はほとんど0の線上か少し上にある。これはつまり毎日新聞は中立の立場あるいは少し賛成の意見に荷重を置いていたことになる。

読売新聞は緑色の線で示してあるが、一度だけ0の線を下回った以外は全体的にビザ発給に対して賛成の意見に荷重を置いていたといえる[11]。

以上の分析から明らかなように、「見出し」をどう付けるかは一見「事実の報道」のようであるが、実はこっそりと読者に意見（荷重＝予期ポテンシャル）を誘導する隠れた手段である。また、それ自体「意見の報道」である評論や投書も、どのような意見を持った人に書いてもらうか、そしてそのどれを載せるかは明らかに新聞社（編集者）の裁量で決められている。反対の意見に触れる機会がなく、しかも自分の読んでいる新聞は「客観かつ公正な」報道をしていると信じている読者は、ある偏った情報に知らず知らずのうちに誘導されているおそれがある。

今回分析した李登輝訪日報道のように、ビザ発給について賛否両論に分かれた場合、同じ出来事を報道しているにもかかわらず「荷重」要素によって賛成側の意見に強くスポットライトを当てるか、それとも逆に反対側の意見に重点を置くかふたつの方法がありうる。

ひとつの事件には様々な側面がある。新聞紙面で報道されているのは当然事実の全部ではない。したがって、新聞紙面という空間ではある特定の事件の局面だけに荷重を持たせてその重要性を伝えることもでき、また反対に全く重みを持たせない、つまり「報道しない」ことも可能となるのである。

民主主義社会において新聞が複数存在しているということは社会がこうした誘導にかからないための大変重要な要素なのである[12]。

Ⅱ-7・2　荷重空間

次に示すグラフは、選出した36本の記事の荷重評価と面積の関係をプロッティングした

11）評価者を多くしてアンケートを行えばより正確かつ充実した研究結果が得られるであろう（資金と人手があればそれは可能である）。
12）一人の読者がこのような誘導にかからないためには、複数の新聞を比較しながら読むことが非常に重要であることが4大新聞の比較研究から理解できる。

ものである。このグラフでは見出しの大きさや記事の字数で定量的に測（量）られる出来事の重要性（「荷重量」）を１つの次元（Ｘ軸）にし、その見出しの印象や書かれた内容の正負評価（賛成・反対、好意的・否定的）をもう１つの次元（Ｙ軸）にする。この２つの次元に張られる「荷重空間」に、個々の報道記事や新聞社全体の行動をプロッティングすることで、その荷重成分を簡潔に表現して比較することができる。

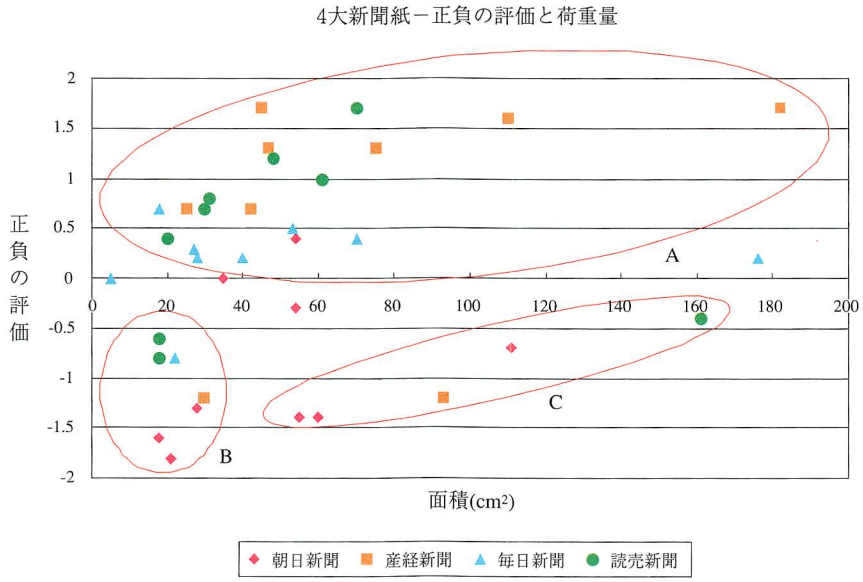


Fig.11

このグラフからはまず賛成の意見を増大させる見出しは反対の意見を増大させる見出しよりも数が多いことが読みとれる。そして賛成の意見の見出し（正の方向）に焦点を絞って観察すれば、面積が大きくなると重み付けの点数（賛成の強度）が高くなる傾向が読みとれる（図中Ａ領域）。

次に、反対意見の見出し（負の方向）に焦点を絞って観察すると、点は２つの領域に集中している。図中の左側下部にあるＢ領域では反対の見出し（負の方向）の面積が小さくなる傾向が見られる。そして逆に右側下部のC領域では、面積が大きければ反対の強度（重み付けの点数）が弱くなる傾向が見られる。

このように、重要性という「量」と、価値評価という「質」をひとつの平面に図示するこの表現方法はさらに改良を加えることでより使いやすくなり、複数の新聞のそれぞれの立場を簡潔に表わす場合に非常に役に立つものとなるだろう[13]。

Ⅱ-7·3　アナログメディア

新聞は単なる「情報内容（メッセージ）」を伝達するメディアなのではなく、「重要度（荷重）」というアナログなポテンシャル量をも伝達しているメディアである。例えば、非常に重要な出来事を伝える場合、もしラジオやテレビであればアナウンサーが何度も絶叫するしかないことを、新聞は朝早くに大きな活字を用い、より多くの面積を割いてその出来事の重要性を表すことができる。つまり、新聞紙面とはそのような出来事の重要度をアナログ量の大小、すなわち見出しの大きさや記事の面積、字数、記事の配列の順序などで表現することのできるアナログメディアなのである。そして、こういった紙面の上にひとつの「荷重空間」を張ることが新聞という２次元平面メディアの決定的かつ本質的な特質であるといえよう。

次に示すグラフは各新聞の総面積と荷重評価との関係を図示したものである。それぞれ横軸（Ｘ軸）に差異の顕著な見出しの総面積を、縦軸（Ｙ軸）に各記事の重み付けの総点数をプロッティングしている。

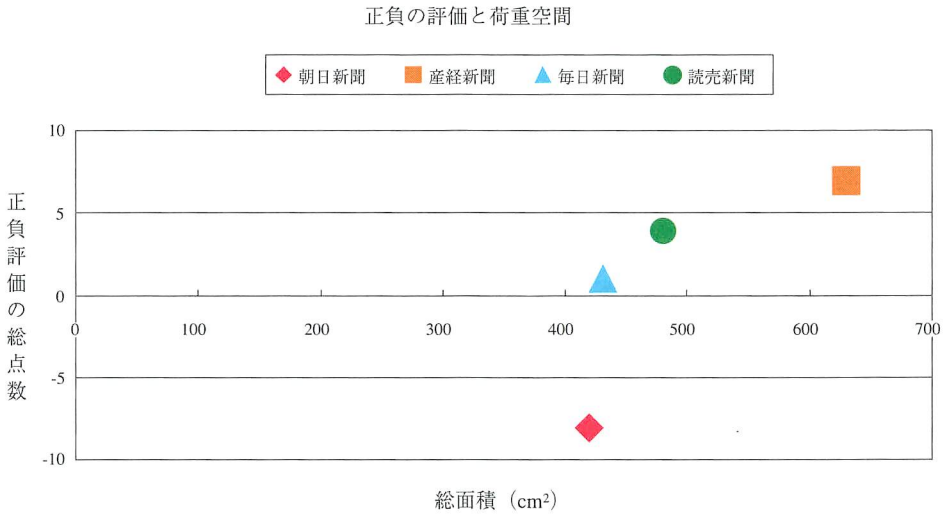


Fig.20

このグラフからは、正の方向である３紙は重み付けの総点数（賛成の強度）が高ければ、総面積（荷重量）が大きくなる傾向があることが読みとれる。つまり、声を大きくして伝

13）活字のポイント数や記事の字数など別々の要素をそのまま点数化し「重要性」ということで単純に加算したが、それぞれをベクトル成分として多次元的に記述したならばこの表現手法はより精密なものとなりうる。評価得点についても尺度をさらに細分化したりあるいは大きく広げたりすることによって、「予期」の質的側面（希望や不安を含む）を空間（グラフ）上に適切に表現できるだろう。

えたい重要なことは、新聞紙面においてはそれだけ面積を割いて我々に伝達しているということである。

新聞というマス＝メディアは他のメディアに比べてその荷重要素が目に見える形で表現されており、わかりやすいという特徴を持つ[14]。したがって、今後インターネットをはじめとするデジタルメディアが普及する情報社会においても、新聞という表現性の高いアナログメディアは重要な役割を果たすと考えられるのである[15]。

Ⅱ-7･4　繰り込み―繰り出し変換（もちつき変換）

最後に以下の図を見ていただきたい。李登輝訪日をめぐる各紙の報道の荷重成分を縦軸に、時間経過を横軸に表記したグラフである。このグラフから各紙の特徴がいくつか読みとることができる。ここでは繰り込み―繰り出し変換を４つの局面に分けて考えてみる。

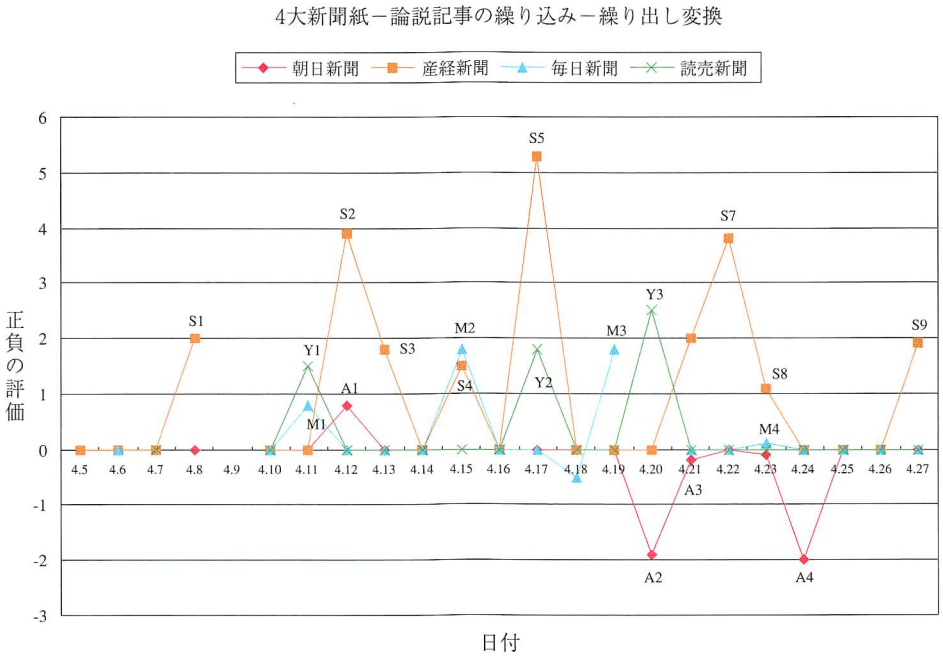


Fig.21

４つの局面とはすなわち、ビザ申請をめぐるＡ．混乱期（４月11日～16日）、Ｂ．調整期（４月17日～20日）、Ｃ．正式にビザが発給された時期（４月21日・22日）、そしてＤ．李登輝

14）しかし、我々新聞の読者はこういった荷重要素を「無意識のうちに」受け取って情報を序列化しているのである。
15）例えば、早朝の情報番組などでは「今日の朝刊の第１面」と新聞紙面の記事を赤い枠で囲み、わざわざテレビで新聞紙面を映して紹介している。これは新聞紙面のもつアナログな荷重を利用しているものと考えられる。

が来日してから離日する時期（４月23日～27日）である。

この４つの時期を手がかりに、各新聞社のビザ発給に対する正負の評価がどのように別れていたかを見てみる。

A 混乱期（４月11日～16日）

まず、産経新聞（Ｓ１）は李登輝がビザ申請する前の４月８日に１本の非常に好意的な社説を掲載した。そして李登輝は10日に代理人を通じて台北交流協会にビザ発給を申請した。11日に読売新聞（Ｙ１）と毎日新聞（Ｍ１）も好意的な社説を掲載した。

次の12日にも産経新聞（Ｓ２）は１本のビザ発給に対して好意的な社説と同じく賛意の強い評論を掲載した。同日、朝日新聞（Ａ１）も１本の好意的な社説を掲載しているが、この段階で朝日新聞は他の３紙に比べて社説を出すのが最も遅かった。

翌13日にも、産経新聞（Ｓ３）はさらに１本の好意的な投書を選出して掲載した。

そして15日にも産経新聞（Ｓ４）は１本の好意的な社説を掲載しており、毎日新聞（Ｍ２）も１本の賛成強度の強い投書を掲載している。

この段階では否定的な論説記事はなかったが、産経新聞は他の３紙に比べて特に多く肯定的な論説記事を掲載している。なお、９日はいずれの新聞社も休刊日なので評価点数はない。

B 調整期（４月17日～20日）

李登輝は台北で記者会見を開いて、ビザの申請があったと述べた。ここからビザ発給をめぐる最終段階に入る。

産経新聞（Ｓ５）は17日にビザ発給に対して非常に好意的な社説・評論・投書をそれぞれ１本ずつ掲載した。またこの日の読売新聞（Ｙ２）も１本の好意的な社説を掲載している。

19日に毎日新聞（Ｍ３）は肯定的な評論と否定的な評論を１本ずつ掲載した。

20日には読売新聞（Ｙ３）が否定的な評論と肯定的な投書を１本ずつ掲載した。また同日の朝日新聞（Ａ２）では非常に否定的な評論を掲載している。

この段階は「もちつき変換」が見られる。具体的には各紙とも同じ日に意見が賛否両論に分かれるなど、肯定的な意見と否定的な意見が混在している。

C 正式にビザ発給（４月21日～22日）

21日に産経新聞（Ｓ６）は好意的な社説を１本掲載した。朝日新聞（Ａ３）はこの日少し否定的な社説を出している。

翌22日に産経新聞（Ｓ７）は２本の好意的な投書を掲載した。

この段階では産経新聞が非常に好意的な社説を掲載している。毎日新聞と読売新聞は何も掲載しておらず、朝日新聞ではマイナスである社説を載せていた。

D 李氏来日～李氏離日（４月23日～27日）

李登輝は４月22日の夜に関西空港に到着した。産経新聞（Ｓ８）は23日に１本の肯定的な評論を掲載した。毎日新聞（Ｍ４）はこの日１本ずつ好意的な評論と否定的な評論を載せた。

朝日新聞（Ａ４）は24日に１本の否定的な評論を載せた。

27日には産経新聞（Ｓ９）が１本の肯定的な評論を掲載した。

この段階では産経新聞は２本の肯定的な評論を掲載している。逆に朝日新聞は非常に否定的な評論を掲載している。読売新聞は何も掲載していない。

全体として、各紙がそれぞれの視点から出来事を重みづけて荷重報道を行っていることがわかる。その中で各社が他社の報道に時間遅れで反応しながら他社（他者でもある！）の意見を自分の中に「くり込み」、また自分の意見を記事という形で「くり出し」て、ひとつの世論が合成されていく様子が見て取れる。

Ⅲ 結　　論

Ⅲ-1 四大新聞の特徴

ここでは以上の分析結果から導き出された各新聞社の特徴をまとめてみる。

Ⅲ-1・1 朝日新聞

荷重の差が最も顕著に表れる見出しの正負分極と重み付けの総平均点数を測定した結果－0.904点であった。これは４大新聞中４番目であった。また、論説記事（評論・社説・投書）における正負分極の重み付けの総点数は－0.893点であった。これも４大新聞のう

ちで最も低い順位となった。また、朝日新聞は2本の評論を出したが、2本とも反対意見のものであった。したがって、正負の重み付けの点数からみると、朝日新聞は4大新聞紙のうちで反対側の意見を増大させており、李登輝訪日に対する支持度は低かったといえる。

朝日新聞の報道量変遷図とそのデータから見ると、朝日新聞の報道量は4月5日から17日までの前半部分よりも、4月18日から27日までの後半部分の方が多くなっていることがわかる。そしてさらに詳細に見ると、前半部分では〈ビザを申請した〉〈ビザ発給をめぐって日本政府の意見が割れた〉などについてはあまり大きく報道していない。

逆に後半部分は20日に報道のピークを迎え、この日に掲載された9本の記事のうち5本が「中国」にかかわることをタイトルにしている。つまり、ビザ発給に際して中国からの反発と日中関係への懸念を他の新聞よりも大きく扱っている。

したがって、朝日新聞はビザ申請の前後では重みを持たせず、後半部分では李登輝訪日に対して中国の対抗措置にかかわることを大きく報道しており、全体を通して見ると中国側の立場を重視して報道していた新聞社だといえよう。

Ⅲ-1・2　産経新聞

見出しの正負分極と重み付けの総点数をみると、産経新聞の総平均点数は0.746点と最も高く、論説記事の重み付けの総平均点数も1.684点と最も高かった。したがって、産経新聞はビザ発給に対して強く賛成していたことがわかる。産経新聞は面積や大きな見出しをはじめとする荷重要素を利用してビザ発給に好意的な意見を増大させており、李登輝訪日に対して最も高い支持を示していた。

また、産経新聞は4大新聞の中でも最も早く李登輝訪日についての報道を開始し、4月9日の休刊日を除いて、27日まで毎日ビザ発給問題について取り上げていた。したがって、産経新聞は総報道量としては全体的に多くなるが、そのほかにも記事の総面積、ポイントの大きさ、字数などの荷重要素のどれをとってみても4大新聞の中で最も大きな荷重をかけて報道していた。

Ⅲ-1・3　毎日新聞

見出しの重み付けの総平均点数から見ると、毎日新聞は0.143点と3番目に高かった。論説記事の重み付け総平均点数も0.482点と3番目の高さであった。このようなことから、今回の毎日新聞の報道では李登輝訪日に対して支持度が3番目だったといえる。しかし、報道量としては4大新聞紙中最も低いものだった。

そして毎日新聞の最も大きな特徴としては、評論を出す際に賛成側の意見と反対側の意見を同時に掲載するということである。見出しの重み付けの点数と論説記事のそれがともに０に近いことから、毎日新聞は均衡性と中立性を重んじていたことがわかる。

Ⅲ-1・4　読売新聞

見出しの重み付けの総平均点数は0.444点で、論説記事の重み付け総平均点数は1.371点とともに４大新聞紙中２番目の高さであった。読売新聞の掲載した評論・社説・投書は産経新聞に比べて本数は少ないものの、全ての点数がプラスを示しており、全体として見れば反対側の意見よりも賛成側の立場に重点を置いた報道を行っていたことがわかる。

Ⅲ-2　４大新聞の荷重総合比較

次に、全体的に新聞同士を比較すると、見出しの重み付けの総平均点数と論説記事のそれをそれぞれ比較した場合、李登輝へのビザ発給に対して支持度が高い順にいずれも

産経新聞＞読売新聞＞毎日新聞＞朝日新聞

となっている。このことから、朝日新聞では双方ともその評価がマイナスであったが、見出しの重み付けの総平均点数と論説記事のそれは順位が同じであることがわかった。したがって、マイナスであった朝日新聞を別とすれば、新聞紙面は李登輝へのビザ発給に対して出した論説記事の重み付けの総平均点数が高ければ高いほど、見出しの重み付けの総平均点数、報道空間、報道字数、文字のポイント数などの荷重要素が増大するといった特徴を持つといえよう。

Ⅲ-3　結び

同じ事柄であっても新聞によって捉え方やその解釈は別様である。日本新聞協会の新聞綱領では、報道の原則として絶対に記者個人の意見を挟まないと定めている。しかし、実際は事件の取材に際してアプローチの仕方やメスの入れ方が新聞ごとに異なっている［深江1993：10–16］。

そして今回新聞紙面に隠された報道荷重の諸要素の分析を通して、新聞紙面では見出しと記事の面積、字数、文字の大きさ、配列の順序などの暗示的な手法と社説や評論などの取捨選択という明示的な手法の併用によってそれぞれに重みを持たせることが可能であることがわかった。したがって、同じ出来事に対する報道であるにもかかわらず、新聞紙に

よって（否、新聞紙面に展開されている様々な「荷重要素」によって）報道される内容の荷重とその報道量に雲泥の差が出ることがある。

以上の考察から、新聞は不偏不党であることを謳いながらも報道の視角と重要性を伝える手法がそれぞれ違っており、それぞれの視点から一定のバイアスをかけて事実を報道していることが明らかとなった。

しかし、本論はそのこと自体の是非を問うものではない。本論はそういったメディアの独自性・相対性をむしろ受け入れ、複数のメディアが「くり込み—くり出し変換（もちつき変換）」によって、民主主義社会における「世論」が形成されていくプロセスを概観したひとつの事例研究である。資料の量や分析の手法は不十分ながらも、それぞれが自律した複数のメディア（複合主体）が互いに他の意見を自分の中に「くり込み」ながら自分の意見を「くり出す」という荷重の変換を重ねることによって、それなりの世論を多元多重に形成していく自由社会のダイナミクスを大雑把にではあるが見ることができた。

他社（他者）の誠実性や真摯さを頭から否定せずに、その意見を聞き、自分の意見も表現しながら、保留と懐疑との中で「くり込み—くり出し変換」を重ねることができれば、「基本的信頼」が存在する限り、時間の中で一定の解が生み出されていく。正しいひとつの意見のみが社会を誘導するタイプの世論のあり方と比べると効率が悪いように思えるが、それは独善や専制に陥らないための重要な社会システムとしての知恵である。

実際、1987年までの台湾では新聞メディアの「もちつき変換」は非常に難しかった。というのも、その当時までの新聞はほとんど国民党政府に好意的な意見ばかりを載せていたからである。現在は日本と同じく民主主義の社会に変わってメディアも多元化し、論争を重ねる「もちつき変換」が行われるようになった。筆者のひとりとして林は台湾からの留学生の立場から日本の新聞メディアの研究を通して様々な意見の存在とそれらの有機的交流が非常に大切であることを学んだ。「多元多重くり込み—くり出し変換」によって社会をさらに理想的かつ包容的なものにしていくことができるだろう。

Ⅳ　課題と展望

Ⅳ-1　残された問題

「荷重報道分析」は、新聞紙面上の「面積」「文字数」「文字の大きさ」などの荷重要素を定量的に把握し、それらを比較することで各新聞社がある事件について行った報道荷重を検討するものである。それらをグラフ化することで、新聞社ごとの報道の「量」と「質」の変化を容易に認識することができる。つまり、各新聞社がある事件を報道する際に、どれほどの関心と重みづけ（荷重）を持って報道したか、を視覚的に比較・検討することができる。

本論では、各新聞社の立場が「李登輝へのビザ発給」に対して賛成（プラス）と反対（マイナス）にはっきりと分かれたことが示された。そしてビザ発給に対する「荷重のプラス・マイナス」の評価軸と「面積」の軸を交差させた場合に、荷重の大きさと紙面上の面積に一定の相関関係が見られた。

時系列で報道量の変化を捉えるのも「報道荷重分析」の特徴である。本論では4紙の報道量の推移をグラフ上で表わした。これによって各紙の報道の傾向を一目で認識することができる。この図（セミオグラフ）は、より精密化することで、各紙の報道の特徴を捉える上で役に立つ表示法となりうるだろう。

本稿は、当初、正負に分極していた複数の新聞社の荷重報道が、最終的にひとつの方向へと収斂していく過程を示すことができた。その限りで、各メディア間に「くり込み—くり出し変換（もちつき変換）」とよぶ相互作用が働いた、と想定できる[16]。

Ⅳ-2　発展の可能性

新聞紙面には本論で取り上げた以外にも「荷重要素」が存在する。また、同じ新聞でも「スポーツ新聞」「外国の新聞」の比較研究も可能だろう。他にも新聞以外へのマスメディアへ応用することも可能である。テレビやラジオであれば「時間」を荷重要素とした分析が可能である[17]。週刊誌であれば今回の新聞と同じく「見出し」と「面積」での比較研究

16）特にこの収束を如実に示したのは「朝日新聞」の報道である。李登輝訪日に際してマイナスの報道から最終的にはプラスの評価に至ったわけだが、このような立場変更や意見の変更は他の新聞社の報道（の「くり込み」）が大きく関与している可能性がある。

が可能だろう[18]。インターネットや広告については、「文字の大きさ」や「面積」、「アクセス回数」や「評価ポイント」などを荷重要素とした分析もできるかもしれない[19]。

最後に、今後ひきつづいて「報道荷重分析」を予定しているテーマを例挙しておきたい。ひとつは2002年5月8日に中国・瀋陽で起きた「瀋陽事件」である。北朝鮮難民の一家5人が瀋陽にある日本領事館へ駆け込み、亡命を求めた事件だが、朝日・産経・毎日・読売の各紙が日本と中国の「主権」と難民の「人権」についてどのような視点から「事実」を読者に提示したかを分析する。

ふたつ目は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）による「日本人拉致問題」の報道である。この問題は長きにわたって日本では触れることすらタブーのようになっていたが、2002年9月17日に小泉首相が平城を訪問することでようやくその実態が明らかとなった。「拉致問題」の荷重報道分析の概要は本年度の日本社会学会第76回大会で報告される［木村他2003］予定である。

【資料】

今回分析した新聞（2001年4月5日～27日までの李登輝訪日に関する朝日・産経・毎日・読売の各新聞）のデータを以下に示す。

（注）

・表中「ASMY」はそれぞれ朝日・産経・毎日・読売の新聞を示す。
・（　）はページ数を示し、同じページに複数の記事があるときは「-1,-2…」で表している。
・「面積」は「見出し」と「記事」の面積をそれぞれ計測している。単位は平方センチメートル（cm^2）。
・「pt.」はその記事の主見出しの大きさを計測し、ポイントで表している。
・「署名」は記事に署名がある場合に表記した。
・「種類」は記事の種類を表しており、社・評・投・意・解・コはそれぞれ社説・評論・投書・意見・解説・コラムである。また、空欄は一般の報道記事である。
・朝刊・夕刊の区別はしていない。
・今回分析した新聞は全て大阪版である。

17）実際、TBSの土曜日22:00～の「ブロードキャスター」では「お父さんのためのワイドショー講座」のコーナーで、その週のワイドショーがどのテーマについてどれだけ「時間」を割いていたかを比較する試みが行われている。これはまさに「時間」という「報道荷重」の分析そのものである。（張2003、程2002を参照。）
18）週刊誌の場合は、見出しと本文の内容が著しく異なっていることがある。
19）広告における文字の大きさに関しては、例えば、最も主張したいことは非常に大きな見出しで表現しており、断り書きなどは非常に小さな（この注よりも小さな文字）で書かれていることが多い。

4.5

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
S(5)	中国「李前総統訪日に注意」	8.16	52.36	247	18	伊藤正	評

4.6

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
S(2)	政治判断決着か　政府部内強まる　「私人、拒む理由ない」	74.95	189.81	703	48		
M(3)	李前総統にビザ検討森首相　外務省に指示　中国の反発必至	70.56	137.55	487	36		

4.7

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
S(2)	対中政策　最前線から	13.63	81.18	375	26	高橋昌子	
Y(2)	李登輝氏の訪日容認　外務省に首相指示　申請あればビザ発給	62.78	115.58	343	48		

4.8

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(5)	李登輝氏訪日問題　中国にらんで難題　日本政府首相周辺に積極論	51.87	206.4	914	36		
S(2)	政府はビザ発給に勇断を	24.48	208.21	864	22		社
S(3)	李登輝氏へのビザ発給進言　亀井氏　首相に	7.48	35.7	198	14		

4.9

休刊日

4.10

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(4)	李登輝氏訪日「わかっとる」森首相	8.16	30.26	140	16		
S(2)	一両日中にビザ申請　台湾側表明　自民発給に前向き	70.42	189.81	574	48		
M(1)	森首相ビザ認める方針　河野外相ときょう協議　李前総統へ人道上配慮	38.88	101.85	445	28		
Y(2)	李登輝氏　訪日ビザを申請へ　きょうにも	8.28	48.26	256	12		

4.11

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)	李登輝氏政府「ビザ発給せず」	16.48	64.39	276	28		
A(3)	訪日目的は心臓病治療　李登輝氏ビザ申請	9.18	51	260	28	田村宏嗣	
S(1)-1	李登輝氏訪日ビザ申請　訪米前に病気治療　今月下旬を希望	113.4	156.52	129	72	矢島誠司	
S(1)-2	外務省指示「受理せず説得を」	16.12	155.02	863	28		
S(2)-1	中国に配慮問題先送り　森政権指導力発揮できず　李登輝氏ビザ申請	60.44	144.14	390	36		
S(2)-2	鳩山氏意欲　最前線から	11	95.7	453	26	笠原建	評
S(2)-3	再検査迫られる李氏　動脈狭窄症　再び深刻化	27.04	68.25	311	26	矢島誠司	
S(2)-4	中国分裂活動には断固反対	15.15	49	203	26	山本秀也	
S(2)-5	台湾側ビザ申請　正式発表	7.37	39.9	228	20		
M(1)	李登輝氏訪日ビザ申請　回避工作失敗　政府は対応に苦慮	40.68	145.95	739	36	台北支局	
M(3)-1	首相主導が失敗　李前総統訪日問題　新たな混乱の種に	27.3	147.56	950	36		評
M(3)-2	中国は改めて反対	4.08	18.36	114	11	近藤伸二	
M(5)	李登輝氏訪日　そんなに騒ぐことなのか	25.95	220.8	1191	28		社
Y(1)	李台湾総統訪日ビザ申請　「心臓疾患の治療目的」	30.8	97.92	432	28	若山樹一郎	

Y(2)-1	李氏ビザ申請で　政府見解割れる　外相ら慎重姿勢	25.56	89.92	402	26		解
Y(2)-2	台湾　申請を確認	3.96	22.32	114	14	若山樹一郎	
Y(2)-3	中国　改めて反対	4.44	26.64	135	14	杉山祐之	
Y(3)	私人のビザは淡々と発給せよ	18.9	197.55	972	22		社

4.12

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(2)	政治活動では困るが	22.8	225.07	1121	28		社
A(4)-1	李登輝氏訪日問題　「先送り外交」限界	30.14	137.53	664	36		
A(4)-2	神崎氏「回避を」　鳩山氏「慎重に」　小沢氏「発給を」	16.32	48.3	231	18		
A(4)-3	「反対理由ない」日本政府批判　台湾総統府	7.48	37.06	182	16	田村宏嗣	
S(2)-1	判断を誤って悔い残す	25.24	204.76	873	24		社
S(2)-2	李登輝氏ビザ問題　外交不信招く政府中国の反発警戒し苦悩	52.06	172.05	975	36		
S(2)-3	政府対応を厳しく批判　自由小沢党首	6.8	27.2	397	14		
S(12)	何を恐れて李登輝氏のビザ申請断るのか　姑息な手段で政治的に処理するな	51.82	430.32	1848	28	屋山太郎	
M(3)	政府は判断回避　ビザの申請否定取り下げ期待し　李氏入国に「反対」　公明神崎代表	42.5	139.38	575	48		
Y(2)	李登輝氏訪日ビザ申請政府　対中関係に苦慮	16.56	117.3	592	20		
Y(2)	台湾側が不信感	3.76	29.23	171	14	若山樹一郎	
Y(14)	李登輝氏入国認めるべきだ	3.9	62.16	305	12	芝田友作	投

4.13

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(5)	李氏ビザ問題副大臣「申請あった」　官房長官は改めて否定	35.02	80.28	307	28		
S(1)	李登輝氏ビザ申請問題　衛藤氏「発給すべきだ」　官房長官事実否認　政府の見解不一致	55.02	182	707	36		
S(4)-1	苦し紛れの対応限界　政府「不信感」増幅の懸念も　李登輝氏ビザ姿勢問題見解不一致	63.95	176.05	533	36		
S(4)-2	「何に気兼ねしている」石原知事　政府対応を批判	27.81	73.14	386	28		
S(4)-3	人道的見地で発給を申請　超党派議員の会	8.5	65.96	353	14		
S(12)	認めてほしい李登輝氏訪日	7.04	86.7	432	14	岡江照子	投
M(2)	李氏ビザ「申請あった」衛藤副外相官房長官は否定	26	70.72	336	28		
Y(2)	李登輝氏ビザ門前払い　政府内から異論　及び腰外交鮮明	29.7	152.85	782	36		

4.14

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(2)	台湾行政院長日本側を批判　李氏ビザ発給問題	8.16	60.18	322	14	田村宏嗣	
S(3)-1	李登輝氏訪日固い決意	17.17	77.52	373	28	矢島誠司	
S(3)-2	中国専門家が抵抗外務省結論出せず　決断下せぬ官邸　内部意見不一致	103.24	544.6	2460	48		
S(5)	中国　阻止は至上命令「外圧に弱い日本」	89.25	273.72	982	48	伊藤正	
M(3)-1	李登輝氏へのビザ発給5閣僚が「賛成」	14.49	24.14	147	28		
M(3)-2	「不退転の決意」李前総統	5.1	48.28	284	14	台北共同	
Y(3)-1	ビザ発給割れる閣内　政権末期課題先送り	94.57	472.07	1525	72	福元竜哉	
Y(3)-2	不満募る台湾側	17.1	84.55	415	36	若山樹一郎	
Y(3)-3	日米への接近中国が警戒	25.5	133.48	631	28	杉山祐之	

4.15

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類

S(2)	李登輝氏ビザ問題で決断を	5.1	95.3	451	12		社
M(5)	李前総統へのビザ発給は当然だ	11.62	78.08	416	16	福田忍	投
Y(2)	李登輝氏が訪日ビザ申請	1.9	18.87	117	11		

4.16

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(2)	李前総統「政治目的はない」 記者会見 ビザ発給強く求める	52.06	153.55	610	36	田村宏嗣	
S(1)	ビザ発給強く求める 李登輝氏記者会見 日本政府の対応を批判	42.24	153.6	637	36	矢島誠司	
S(2)	李登輝氏会見「訪日治療目的」 ビザ問題「発給」楽観視も	50.92	202.95	530	48	矢島誠司	
M(3)	ビザ公式に要求 心臓病の治療目的 日本政府の対応批判	51.87	156.74	713	48	近藤伸二	
Y(3)	李登輝氏「ビザ発給を」 台北で会見 日本政府の対応批判	90.6	204.21	626	48	若山樹一郎	
Y(5)	李前総統の会見 「ノーコメント」政府首脳	8.64	25.2	104	14		

4.17

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(3)-1	李登輝氏訪日ビザ 時間かけ判断 政府「発給せず」見直す	73.14	144.66	456	48		
A(3)-2	台湾副総統が強く日本非難	5.78	23.8	121	16	田村宏嗣	
A(3)-3	京大OBら署名	3.54	16.32	70	16		
A(3)-4	「阻止明確に」中国はけん制	7.82	30.6	142	16	谷村浩一	
S(1)	李登輝氏訪日 医療目的限定も ビザ発給政府が最終調整	58.63	199.74	866	48		
S(2)	ビザ発給決断のときが来た	21.45	186.24	872	22		社
S(4)-1	森首相に決断迫る 李登輝氏ビザ問題 台湾超党派議員団発給求め公式書簡	97.6	192.09	537	48	矢島誠司	
S(4)-2	訪日実現めざし１万3000人の署名 京大のOBら活動	7.48	60.77	317	14		
S(4)-3	「台湾問題」避けられぬ 中国発給の態度を示す	6.09	46.92	240	14	北京時事	
S(12)-1	李登輝氏の思いに応じよ ビザ拒否すれば日本の国家の汚点	49.5	515.16	1788	36	岡崎久彦	評
S(12)-2	李氏へのビザ政府は責任回避	16.05	168.91	801	20	林建良	投
M(1)	李前総統訪日人道的観点で 外務次官が検討表明	7.35	28.7	168	14		
M(2)-1	ビザ求め首相に書簡 台湾の６議員 超党派出で	26.25	61.88	309	26	近藤伸二	
M(2)-2	受け入れの拒否 中国日本に要請	5.6	31.5	182	14	板東賢治	
Y(2)-1	ビザ発給拒否 中国が求める 李氏訪日問題	8.51	44.28	244	12	杉山祐之	
Y(2)-2	近く最終判断 官房長官	6.12	29.16	152	12		
Y(3)	李登輝氏訪日混乱を増幅するまやかし対応	19.44	203.93	960	20		社

4.18

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)	李登輝氏ビザ発給 外務省「適当ではない」 首相外相再び協議へ	52.06	178.84	762	48		
A(3)-1	認知 中国民族感情背に反発 日本なぜノーと言えぬ中国大使が怒りの会見 民主は容認	144.66	657.1	1970	72	谷村浩一 田村宏嗣	
A(3)-2	米はビザ発給月末から訪米へ	5.78	31.28	180	14	田村宏嗣	
S(1)	ビザ発給の意向 李登輝氏訪日 人道重視 首相今日にも結論	47.52	171.1	701	48		
S(2)-1	日本外交の信頼優先 李登輝氏ビザ発給へ外相らはなお慎重	43.52	291.72	798	36		
S(2)-2	ビザ発給 拒否求める駐日中国大使「政治的な訪日」強調	26.78	52.7	197	28		

S(2)-3	「北京は口出す筋合いはない」自由小沢党首	7.14	38.08	199	16		
M(1)-1	司令塔なく政府分裂	156.32	480.95	1274	72		
M(1)-2	日本の対応非難台湾側	5.95	48.62	296	14	近藤伸二	
M(1)-3	駐日大使召還中国側	4.9	37.91	268	14	板東賢治 竹之内満	
M(1)-4	中国の干渉批判　台湾総統	5.85	25.9	151	14	近藤伸二	
M(1)-5	拒否する理由ない	3.74	24.15	175	12	中嶋嶺雄	評
M(1)-6	入国自体は政治活動	5.1	24.5	213	12	浅井基文	評
M(2)	首相　最終判断へビザ発給外相慎重論伝える　李氏訪日問題	27.04	76.51	430	36		
Y(1)	李登輝氏訪日ビザ　首相　発給検討を指示　滞在先限定李氏側応じる意向	47.85	165.6	782	36		
Y(2)	李登輝氏ビザ問題「政治的狙い明白」中国高官　日本政府けん制	17.52	71	386	20	石井利尚	

4.19

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(3)	首相ビザ発給に意欲　李氏訪日問題「人道的に判断」	28.84	111.8	499	28		
S(1)	(産経抄)	3.36	113.5	701	20		コ
S(2)-1	李登輝氏訪日問題　民主「ビザ発給すべきだ」鳩山代表が党見解表明　政府の対応遅れ批判	51.42	253.35	1063	28		
S(2)-2	台湾　李氏訪日早急に実現を	22.44	119.34	701	26	矢島誠司	
M(5)	ビザ発給を早急に決めよ	32.2	258.28	1202	24		社
Y(2)	李登輝氏ビザ発給首相強い意欲	8.64	67.68	395	22		

4.20

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)-1	李前総統にビザ発給へ　政府医療目的に限定　首相意向で外相指示	172.65	319.29	838	72		
A(1)-2	中国　強く警告	12.24	40.8	192	28	村上太輝夫	
A(1)-3	「森内閣最後の手柄になる」首相　昨秋に「約束」	35.7	177.45	794	28		評
A(2)	日中関係に冷え込み	36.18	202.76	968	48	五十川倫義	
A(3)-1	人道配慮掲げた日台　李前総統にビザ発給へ　外相抑え官邸主導	160.63	536.71	1777	72	谷村浩一 田村宏嗣	
A(3)-2	本人「健康のため」ゴルフ断って熱弁血管治す手術訪問の病院に実績	21.45	129.25	540	20	田村宏嗣	
A(4)	押し切られた外務省　募る不信「李側は新政権も縛る気だ」 外相「発給ならやめなきゃならない」 幹部「橋本の援護も効果はなかった」	182.4	486.75	1850	72		
S(1)-1	李登輝氏訪日問題　条件付きビザ発給へ　政府方針医療限定合意なら	122.32	124.7	677	72		
S(1)-2	誓約書署名要求の場合　李氏　拒否の構え	27.2	224.8	670	36	矢島誠司	
S(2)	「人道配慮で」反発回避条件受け入れなお不透明感残る	65.91	356.6	1073	48		
Y(1)-1	李登輝氏ビザ発給決定　病気治療に限定政府「民間人」を考慮	153.72	277.64	674	72		
Y(1)-2	誓約書へ署名　李氏側が難色　「条件強制ならのめぬ」	7.56	37.63	198	18		
Y(3)-1	李登輝氏にビザ発給決定森首相強意欲崩さず　「任期内」こだわり検討指示から半月　最後まで渋った河野外相対中悪化懸念	117.68	650	1768	72		
Y(3)-2	中国重ねて反対を表明	6.65	63.34	346	18	高山伸康	
Y(3)-3	政府の対応拙劣一語	22.57	112.42	495	36	中西寛	評
Y(3)-4	混乱を拡大した過度の対中配慮	17.28	200.37	969	20		社

4.21

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)-1	李前総統あす来日　政府ビザ発給　中国強く抗議	111.15	229.59	623	72		
A(1)-2	台湾は歓迎	4.42	29.24	137	18	田村宏嗣	
A(1)-3	中国訪日取りやめ相次ぐ	25.84	164.1	808	36	古村浩一	
A(2)	対中説明に誠意尽くせ	22.04	232.94	1123	28		社
A(3)-1	日中　日台　双方に大波「関係破壊」市民に反日感　中国	124.33	452.68	1080	72	村上太輝夫	
A(3)-2	米に傾斜　いっそう強く　台湾	27	115.6	647	36	田村宏嗣	
A(3)-3	病院　受け入れ準備開始　地元	15.15	82.62	403	28		
A(3)-4	米も査証発給	3.4	22.1	107	16	立野純一	
A(3)-5	「日中関係へ悪影響憂慮」公明党神崎代表	6.8	32.64	184	18		
S(1)-1	李登輝氏にビザ発給　心臓病の治療限定外相「訪日　22日から26日」	184.41	356.6	891	72		
S(1)-2	李氏が謝意表明　条件交渉側近は否定	25.84	115.44	602	36	矢島誠司	
S(1)-3	問われる主体的判断	16	84.66	370	28	高橋昌子	
S(2)-1	李登輝氏禍残してやっと実現日本を卑しめた外交対応	60.6	386.46	1559	36		社
S(2)-2	駐日大使召還か王外務次官が厳重注意	92.17	144.03	833	48	伊藤正	
S(2)-3	対日不信しこり残す	28.31	110.16	522	36	矢島誠司	
S(2)-4	中国党部長の訪日中止	6.8	30.4	170	18	山本秀也	
S(2)-5	米李氏にビザ　「私人」即日発給	5.44	37.74	223	14	西田令	
S(2)-6	中国に毅然と向かえ	13.65	105	522	26	中嶋嶺雄	評
S(2)-7	李登輝氏訪日をめぐる動き	6.6	127.5	142	11		
S(3)-1	関係修復長期化　ビザ発給政府対中政策立て直しへ迷走３週間　駆け引き激しく発端昨年10月からの因縁首相は前向き姿勢あつれき外相いったん辞意	187.65	1123.72	3264	72		
S(3)-2	16年ぶり訪日の夢かなう　したたかな政治家の顔	32.3	177.84	963	36	矢島誠司	
M(1)-1	李登輝氏にビザ発給　中国対抗措置の構え医療限定あす来日	175.15	287.44	766	72		
M(1)-2	阿南大使呼び抗議	21.84	98.8	576	36	板東賢治	
M(2)-1	親台派土壇場で巻き返し　親中国橋本派総裁選で手いっぱい　李前総統にビザ　不協和音最後まで	164.07	660.66	2918	72	近藤伸二	
M(2)-2	日中関係何ら影響を受けない河野外相	11.13	44.52	238	18		
M(7)-1	李登輝氏ビザ発給日中関係冷却化も　教科書問題と連動	61.6	171.54	926	48	板東賢治	
M(7)-2	日本語で「ありがとう」	2.31	28.4	189	11	近藤伸二	
M(7)-3	陳総統　外交手腕発揮狙い　「日台交流」強化図る	31.2	151.88	891	28	近藤伸二	
M(7)-4	米もビザ発給	2.04	28.56	181	11	中井良二	
Y(1)-1	李登輝氏あす来日　「政治抜き」でビザ発給　政府中国に理解求める　26日まで治療滞在	160.77	399.28	1004	72	若山樹一郎	
Y(1)-2	中国が抗議申し入れ　日本大使に外務次官対抗措置も示唆	16.56	50.4	220	20	石井利尚	
Y(1)-3	李氏ビザ申請米は即日発給	5.4	60.12	352	16	林路郎	
Y(3)-1	李登輝氏訪日決定　「対中」新首相に難題中国　日台の交流拡大懸念	73.5	453.25	1310	72		
Y(3)-2	中国外務次官申し入れ要旨	8.74	78.4	446	16	杉山祐之	
Y(3)-3	訪日中止相次ぐ　共産党幹部ら	5.92	30.34	156	14	杉山祐之	

4.22

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(3)-1	李前総統は今夜大阪入り　16年ぶり訪日　中国側反発強める	58.91	141.5	488	48	田村宏嗣	

A(3)-2	伝統的手法で訪日批判　新華社通信	5.44	28.9	152	16	古村浩一	
A(3)-3	米発給ビザ５年間有効	5.44	22.78	119	16	田村宏嗣	
A(3)-4	中国側が批判	3.54	24.48	137	16	古村浩一	
S(1)-1	李登輝氏　今夕関空に	24.61	70.04	359	28	矢島誠司	
S(1)-2	中国一両日中に対抗措置か	26.03	123.76	593	28	伊藤正	
S(1)-3	(産経抄)	2.97	116.76	699	18		コ
S(7)-1	李へのビザ発給喜ばしい	7.59	74.8	397	14	古田桂三	投
S(7)-2	侮辱に当たる条件付き訪日	7.59	106.08	425	14	田中直人	投
M(1)	李前総統きょう来日	17.51	56.12	261	28	近藤伸二 板東賢治	
M(4)-1	李登輝氏に米ビザ発給陳水扁総統訪米の動き米中に新たな波紋	40.28	133.32	699	36	上村幸治	
M(4)-2	発給は「数次ビザ」　５年有効台湾外交自由度増す	31.2	71.27	194	28	台北共同	
M(4)-3	中国抗議申し入れ　外務局「誤り正すべきだ」	13.8	71.35	408	22	板東賢治	
Y(1)	李登輝氏きょう大阪入り	19.62	80.66	384	26	若山樹一郎	
Y(2)-1	中国高官訪日見合わせ　李鵬氏予定に影響も	30.52	78.68	309	36	石井利尚	
Y(2)-2	観光ビザ発給　米国に警告　中国外務省	10.08	35.77	158	18	杉山祐之	
Y(2)-3	中国マスコミ一斉に李前総統批判	17.44	101.22	532	26	杉山祐之	
Y(7)	李登輝氏に再び脚光　巧妙駆け引きで訪日実現　台湾政界陳総統と連携観測	66.6	294.96	779	72	若山樹一郎	

4.23

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)-1	李前総統が来日　きょう大阪で歓迎会	110.08	425.4	630	72		
A(1)-2	台湾出発の際要人が見送り	6.12	44.88	231	14	田村宏嗣	
A(1)-3	中国　報道せず	3.4	15.64	77	14	五十川倫義	
A(31)-1	歩みの先笑顔と緊張　人間のすごみと悲哀 京都訪問拒否に疑問　日中関係ぎくしゃく裏がなければよいが	104.69	616.38	1786	72		
A(31)-2	「案外平常です」検査目的強調	45.59	158.4	502	48	野嶋剛	
A(31)-3	台湾の独立「言ってない」	5.44	29.92	144	14	田村宏嗣	
S(1)-1	李登輝氏16年ぶり来日　あす倉敷へ会見など行わず	23.1	362.84	802	48		
S(1)-2	中国側は「沈黙」通す	26.03	71.06	338	28	伊藤正	
S(2)-1	真正面に病気療養　国際世論納得させた	39.15	200.6	877	36	小島朋之	評
S(2)-2	台湾冷静対応呼びかけメディア加熱にクギ 副総統「勝った負けたではない」	128.36	393.04	664	72	福島香織	
S(2)-3	台湾独立の陰謀非難「中国はでたらめ」	14.75	44.2	201	18	福島香織	
S(3)	対中関係の対立あおる　日本国内に台湾への野心	90.54	306.9	1413	48	山本秀也	
M(1)	李前総統が来日　大阪に宿泊倉敷で治療	63.5	290.37	492	72	山科武司	
M(3)-1	「日台」好転に期待　台湾　言動などを注視 中国「約束守るか」政府に懸念　日本　昨秋　人工血管入れる主治医「半年後の検査必要」	93.9	540.16	2212	36	板東賢治 近藤伸二 堀山明子 奥野敦史	
M(3)-2	あくまでも民間人訪日	7.8	62.08	318	22	中嶋嶺雄	評
M(3)-3	タイミングが悪かった	7.8	62.08	323	22	衛藤審吉	評
M(7)	反発利用のしたたかさ	40.5	279.6	1179	48	近藤伸二	
Y(1)	李前台湾総統が来日　大阪滞在　心臓病治療 あす倉敷へ	68.15	152.5	507	72		
Y(2)-1	李登輝氏「平常な気持ち」機中で会見　リラックス	47.88	239.6	1117	48	若山樹一郎	
Y(2)-2	台湾メディア大阪へ100人　取材合戦が過熱	25.78	103.84	455	28		
Y(2)-3	台湾祝福ムード	4.68	55.48	293	14	末続哲也	
Y(7)-1	李登輝氏16年ぶり来日　緊張五日間笑顔で幕開け　関空などで歓迎の波「涙がでるほど感謝」	143.11	399.5	857	72	石井利尚	

Y(7)-2	「二国論が狙い」「無用の混乱招く」	5.4	50.76	272	12	森千春	
Y(7)-3	「中台」一層の冷却化必至　李登輝氏訪日不信感深める中国　日米との連携警戒	27.55	118.26	568	48	末続哲也	
Y(31)-1	日中関係を中止　韓国	143.79	231.21	1587	72		
Y(31)-2	日台交流格上げ期待陳政権	23.63	81.42	342	22		評

4.24

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)	友好協会長の訪日中止　李氏訪日に中国が反発副首相級まで波及	65.78	150.15	587	48	古村浩一	
A(3)-1	李氏訪日政治性台湾が脚色　副総統「中国は新思想を」	28.84	104.78	453	28	田村宏嗣	
A(3)-2	ビザ「未申請」発表「要件欠いた」外務省が説明	7.48	32.3	175	16		
A(7)	李氏訪日　中台の思惑なぜ読めぬ日本	32.34	332.91	1355	24	中江洋介	意
A(30)	「李氏の依頼」強調　倉敷中央病院主任部長会見　きょう冠動脈検査森首相らが花束届ける	41.13	157.55	739	36		
S(2)-1	滞在一日延長求める李登輝氏側　外務省に打診	54.43	142.48	329	48		
S(2)-2	台日議員交流近く会発足へ	8.16	41.2	195	16	福島香織	
S(2)-3	槙田局長の責任追及義連　旗揚げ当面見送り　官房長官中止要請「事務方を責めるな」	36.05	145.18	676	36		
S(5)-1	中国　沈黙続ける対日けん制が一転対抗措置抑制も　関係悪化を回避か	87.21	246.84	944	48	伊藤正	
S(5)-2	台湾副総統米のビザ発給に謝意	7.48	30.6	162	18	福島香織	
M(2)-1	突然の予定変更　現場混乱　李氏「とおり抜けやめ大阪城へ」	30.37	197.64	586	36		
M(2)-2	一面トップで台湾各紙報道	3.54	19.72	129	12	近藤伸二	
M(2)-3	日本の議員に謝意台湾議員きょう来日	3.54	20.4	143	12	近藤伸二	
M(2)-4	呂副総統も謝意	2.04	14.96	95	12	近藤伸二	
Y(7)-1	中国　李氏の動向注視対日対抗措置に慎重	35.64	99.1	408	36	杉山祐之	
Y(7)-2	台湾行政院長が中国に理解要請	5.04	46.08	274	14	末続哲也	
Y(35)	大阪城「懐かしい」　李登輝氏きょう倉敷へ	15.12	138.96	338	28		

4.25

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(1)	李登輝氏問題李鵬氏訪日に影響か　中国慎重に対応見極め	53.04	143.82	559	36	古村浩一	
A(2)-1	李前総統　倉敷で治療大事取り一泊入院	52.06	174.71	431	36		
A(2)-2	李氏の病状「軽い」　診察の医師訪米の影響なし	32.64	99.28	414	36		
A(2)-3	李氏ビザ発給華僑らが抗議	6.12	30.26	154	16		
S(1)	李登輝氏訪日李鵬訪日見直し　中国対抗措置を示唆	50.32	209.72	935	36	伊藤正	
M(1)	李鵬氏が訪日見直し　李登輝氏訪日に抗議	7.2	55.65	351	18	板東賢治	
Y(2)-1	李鵬氏訪日延長か中止示唆　中国外務省教科書　李登輝氏にビザで	29.68	68.4	267	36	杉山祐之	
Y(2)-2	李登輝前総統が小池議員と会食	6.48	32.4	178	14		
Y(30)-1	李登輝氏が経過入院倉敷	16.64	76.27	303	28		
Y(30)-2	在日中国人系の７団体が抗議声明	5.76	25.92	132	14		

4.26

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(3)-1	李登輝氏　きょう離日30日訪米治療後の経過は順調	28.08	189.6	331	26		
A(3)-2	日中関係再構築迫られる新政権	3.4	33.66	181	16		

A(8)	李鵬氏訪日延期　日本側「影響は限定」経済関係　進む相互依存	27.81	98.79	442	28		
S(3)	李登輝氏きょう帰台　訪米出発1か月程度延長へ	37.08	97.92	449	28		
S(5)-1	厳しい対日けん制　李鵬氏訪日延期「日米結託」を警戒中国政府台湾独立に危機感	130.7	370.74	947	48	伊藤正	
S(5)-2	李登輝氏「日本は変わるよ」	21.14	195.64	1053	36	上坂冬子	評
M(2)	李鵬氏が訪日見直し　李登輝氏訪日に抗議	30.6	108.8	557	36	堀山明子	
Y(2)	李鵬氏の早期来日に期待感　官房長官	8.28	50.4	275	14		
Y(7)	小泉新政権に原則示す　「歴史認識」や「台湾」妥協せず	66.26	174.22	699	36	杉山祐之	
Y(34)	李登輝氏きょう離日　「体調いい」笑顔で退院	18.36	71.28	334	26		

4.27

ページ	見出し	見出し面積	記事面積	字数	pt.	署名	種類
A(3)	李前総統「再訪日」にいい感触中国批判しつつ　修復期待	27.81	178.68	883	36	野嶋剛 田村宏嗣 古村浩一	
S(5)-1	李登輝氏改めて存在感　訪日を振り返る私人貫いた「政治家」　中国の批判かわし　発言に細心注意	151.02	505.23	1321	72	長谷川周人	
S(5)-2	李鵬氏の訪日延期理由　中国「修復」確認	23.85	80.64	346	36	山本秀也	
S(5)-3	訪米を1ヵ月延長　数次ビザ取得　「いつでもいける」	26.26	95.54	446	36	矢島誠司	
S(12)	李登輝氏の見事な戦略を見た　歴史は一人の人間によって作られた	62.79	429.87	1943	36	上坂冬子	評
M(1)	李前総統が台湾に戻る　訪米は5月末	7.35	72.8	452	18	近藤伸二	
Y(7)-1	李氏訪日「台湾に追い風」　外交環境悪化の声も　滞在五日混乱なく終了	165.87	554.7	1296	72	若山樹一郎	
Y(7)-2	日本で歓迎されず　活動制限中国「政治抜き」認める	29.43	95.04	446	26	杉山祐之	

【文献】

朝日新聞整理部、1983『あなたも編集者』大阪書籍

飽戸弘、1992『コミュニケーションの社会心理学』筑摩書房

池田謙一、2000『コミュニケーション　社会科学の理論とモデル5』東京大学出版会

伊大知昭嗣、1981『報道論入門』教育資料出版会

稲垣武、1996『新聞裏読み逆さ読み　マスコミの生理と病理』草思社

尹榮喆・李光鎬、2000「日本と韓国の領有権紛争に関する新聞報道の内容分析」『メディア・コミュニケーション』No.50：141-155

ウィーバー,D他（竹下俊郎訳）、1988『マスコミが世論を決める』勁草書房

大石裕、1993『ニュース・メディアと世論』関西大学出版部

大石裕・岩田温・藤田真文、2000『現代ニュース論』有斐閣

大橋弘、2002『新聞論をこえて』風媒社

岡田直之、1992『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会

岡田直之、2001『世論の政治社会学』東京大学出版会

岡部慶三・荒瀬豊・山本透他、1957「頂上会談はいかに報道されたか—各国主要新聞の内容分析」『東京大学新聞研究所紀要』No. 6 ：41-82

児島和人、1993『マス・コミュニケーション受容理論の展開』東京大学出版会
金子喜三、1976『新聞学研究』芦書房
川井良介、1987『世論とマス･コミュニケーション』ブレーン出版
角間隆、2000『李登輝・新台湾人の誕生』小学館文庫
木村洋二、1995『視線と「私」』弘文堂
木村洋二、1999「ソシオンの一般理論（Ⅰ）」『関西大学社会学部紀要』30（３）：65-126
木村洋二、2000「ソシオンの一般理論（Ⅱ）」『関西大学社会学部紀要』31（23）：63-149
木村洋二、2001「ソシオンの一般理論（Ⅲ）」『関西大学社会学部紀要』32（２）：1-104
木村洋二・板村英典・池信敬子、2003「日本人『拉致問題』をめぐる４大紙の荷重報道分析」第76回日本社会学会大会報告
木村洋二・増田のぞみ、2001「マンガにおける荷重表現―ページの『めくり効果』とマンガの『文法』をめぐって」『関西大学社会学部紀要』32（２）：205-251
工藤強勝、1999『編集デザインの教科書』日経デザイン
熊田亘、1994『新聞の読みかた上達法』ほるぷ出版
黒川貢三郎、1997『マス･コミュニケーション論』南窓社
黒田勇、1999『ラジオ体操の誕生』青弓社
K,Krippendorff, ContentAnalysis: An Introduction to ItsMethodology, BeveryHills: Sage Publications, 1980（三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳、1989『メッセージ分析の技法―「内容分析」への招待―』勁草書房）
小林弘忠、1993『新聞記事ザッピング読解法』自由国民社
小林弘忠、2002『ニュース記事にみる日本語の近代』日本エディタースクール出版部
古森義久・井沢元彦・稲垣武、2002『朝日新聞の大研究―国際報道から安全保証・歴史認識まで』扶桑社
佐藤卓己、1998『現代メディア論』岩波書店
渋谷重光、1983『コミュニケーション操作の構造』ブレーン出版
視覚デザイン研究所編集室、1996『編集デザインの基礎知識』視覚デザイン研究所
新聞整理研究会編、1966『新聞整理の研究』日本新聞協会出版
高橋正則、1975『新聞概論（Ⅱ）』高文堂出版社
多川精一、1967『現代レイアウト入門』現代ジャーナリズム出版会
武市英雄・松木修二郎・山田實・山中正剛、1976「東京都知事選挙（一九七五年）をめぐる新聞紙面の分析―朝日・毎日・読売・サンケイの四紙を中心にして―」『新聞学評論』日本新聞学会、No.25：48-67
竹内郁郎・児島和人、1982『現代マス･コミュニケーション論』有斐閣
竹内郁郎・児島和人・橋本良明、1998『メディア・コミュニケーション論』北樹出版
田崎篤郎・児島和人、1992『マス･コミュニケーション効果研究の展開』北樹出版
竹下俊郎、1998『メディアの議題設定機能』学文社
竹下俊郎、1994「内容分析のツールとしての新聞記事データベース―利用に際しての注意点」『新聞研究』日本新聞協会、No.516：60-63
田中伯知、1993「日本の新聞論調にみる太平洋戦争史観―社説，連載，談話・転載記事の内容分析―」『慶應義塾大学新聞研究所年報』No.40:27-42
田宮武、1997『テレビ報道論』明石出版
田村紀雄・小玉三意子・蒲池紀生・川本勝、1991「「国際化」時代の地方新聞の対応―「内容分析」手法に依る考察―」『東京経大学会誌』No.170：53-85
タルド,G（稲葉三千男訳）、1964『世論と群集』未来社刊

張弧、2003「映像からみた『選択された事実』—『瀋陽日本総領事館事件』を事例として」『関西学院大学社会学部紀要』94：89–98
津金澤聡廣・田宮武、1999『テレビ放送への提言』ミネルヴァ書房
辻村明、1981『戦後日本の大衆心理』東京大学出版社
鶴木真、1999『客観報道』成文堂
程曄、2002「『瀋陽日本総領事館事件』に見られるテレビ報道の偏向」第75回日本社会学会大会報告要旨
中井久夫、1991『中井久夫著作集　精神医学の経験　4　治療と治療関係』岩崎学術出版社
日本機関紙協会大阪府本部、1981『編集企画の立案百科』日本機関紙出版センター
日本新聞協会審査室、1983「新聞社説の内容分析調査」『新聞研究』No.387：72–77
Berger, P. & T. Luckmann 1966 *The Construction of Social Reality*, Anchor（山口節男訳1975『日常世界の構成』新曜社）
長谷川慶太郎・中嶋嶺雄、2001『威圧の中国、日本の卑屈』ビジネス社
波多野完治編、1961『世論・宣伝』大日本図書
春原昭彦・武市英雄、1998『日本のマスメディア』日本評論社
林ヶ谷昭太郎、1990『日本の新聞報道』池田書店
フェルドマン・オフェル、1988「昭和60年同日選挙における新聞報道の内容分析—社説及び特集記事に見る傾向—」『慶應義塾大学新聞研究所年報』No.31：95–112
深江義幸、1993『現代新聞学』大阪経済法科大学出版部
福井逸治、1994「新聞記事作法」三一書房
藤竹暁、『メディアになった人間』中央経済所
藤森善貢、1997『新編出版編集技術』日本エディタースクール編
船津衛、1996『コミュニケーション・入門』有斐閣
Berelson,B.R.,1952 "Contents Analysis in Communication Research", Free Press（稲葉三千男・金圭煥訳、1957「内容分析」『社会心理学講座7　大衆とマスコミュニケーション（3）』みすず書房）
堀江湛・小林良彰、1981「同時選挙をめぐる三大紙の内容分析—大平総理の死去と新聞報道—」『新聞学評論』日本新聞学会、No.30：219–236
堀江湛・城所洋子、1978「新自由クラブの躍進と新聞報道—総選挙における新聞報道の内容分析—」『新聞研究』日本新聞協会、No.319：65–71
真鍋一史、1975「新聞社説の内容分析—石油危機・物不足事件を手がかりとして—」『新聞研究』日本新聞協会、No.287：54–59
真鍋一史、1974「マス・コミュニケーションの調査—新聞記事の内容分析—」『関西学院大学社会学部紀要』No.28：15–36
三樹精吉、1966『新聞の編集と整理』現代ジャーナリズム出版会
保本政和、1979『編集整理入門』日本工業新聞社
吉岡至・藤田真文・塚本清二朗、1994「アジアにおける国際情報システムの実態—「東京サミット」の新聞報道に関する内容分析—」『新聞研究』日本新聞協会、No.511:65–74
吉見俊哉、2001「経験としての文化　言語としての文化」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』22–40せりか書房
和田洋一、1982『新聞学を学ぶ人のために』世界思想社
林文川、2002『李登輝訪日をめぐる主要新聞の「荷重報道」の研究』関西大学大学院社会学研究科2002年度修士論文

—2003. 7 . 7 受稿—